《巻頭言》

契約の更新

日本福音主義神学会が、一九七〇年四月二七日に設立されてより、七年の歳月を既に経、今年は第八年目を迎えつつある。聖書的に七年と言えば、「ひとめぐり」であり、今年は第二番目の「ひとめぐり」の歩みを踏み出しているのである。この時に当り、わたしたちは、最初の「ひとめぐり」の七年間を、主権者としてわたしたちを導いていて下さる神に賛美と感謝を捧げつつ、正しく回顧し、始まっている「このひとめぐり」の歩みが、より一層神の御旨にかない、このわたしたちの学会が教会に仕える神学会として地道であっても、着実な発展をなし得るよう努めなければならない。

本学会誌の創刊号において、発刊の辞として初代の理事長であった矢内昭二氏は、本誌が立つ三つの根本的確信を次のように明示されている。

一　聖書の十全霊感を信じる福音主義キリスト教は、真理である。

二　福音主義キリスト教は、厳密な学問的解明と弁証を要求し、またそれが可能である。

三　健全な教会の形成と強力な福音宣教のため、福音主義キリスト教神学は、必須である。

過去七年間、わたしたちは、これらの確信点に、焦点をあわせる学会活動を本誌を通して行う努力をして来た。これらの初期の確信を、「契約の更新」的姿勢をもって、この第二の「ひとまわり」を踏み出し始めた今、改めて神と

人の前で再確認しなければならない。特に、日本福音主義神学会の規約においても「本会は聖書の十全霊感を信じる福音主義キリスト教の立場に立つ」（第三条）が、唯一の明示された教義であることを考え合わすと、今後、本誌が、そして日本福音主義神学会が、今までより以上に正しく強調してゆくべき点は、単に聖書学の分野のみからでなく、神学全域から、キリストの教会がよって立ち、わたしたちの信仰がよって立っている聖書の絶対的権威を、聖書の十全霊感との関連で正しく主張、提示してゆくことである。この面での学究、研鑽が、わたしたちに託せられた使命であり、チャレンジであるとも言い得る。健全な教会の形成も、強力な福音宣教の業も、個人の信仰生活の育成も、信仰と生活の誤りなき唯一の規範である聖書の権威を軽視したり、無視しては、あり得ないからである。

幸いにも、三百余名の学会員（正、準会員を含めて）の中から、本学会設立当時の学会員より若い世代の有能な学徒が、最近諸教会に神によって起こされつつあることは、感謝すべきことである。神の栄光のため、福音主義キリスト教の健全な発展のため、聖書の権威を高くかかげ、それら若い世代の学徒が、最初の「ひとまわり」に関係した学会員を超える出藍の業をなし遂げられることを切に祈り期待するものである。それこそ、本学会誌の初期の確信を、今に、そして将来にと伝承してゆく「契約の更新」と言い得る。

全てのものの支配者である父なる神の導きと、その子なる神イエス・キリストの恵と、大教師である聖霊なる神が、本学会誌の上に、日本福音主義神学会の上に、そして全学会員の上に豊かに臨んで下さるように心から祈るものである。

一九七七年一一月一日

日本福音主義神学会理事長　服部嘉明

カルヴァンの聖餐論

金田幸男

一五二九年一〇月一日から四日まで、マールブルグ会議が開催された。この会議は、ヘッセン地方伯フィリップの仲介によるものでルター・メランヒトンらドイツの宗教改革者、バーゼルのエコランパディウス、ストラスブルグのブッツァーら南ドイツの帝国都市宗教改革者、それに、チューリッヒのツウィングリらが出席した。一般に、このマールブルグ会議は、福音主義者の不一致を露呈した事件とみられているが、それは一方的な見方にすぎない。もともと、この会議は、その年の春のシュパイエル国会の福音主義者に対する威嚇的決定を契機にして、フィリップの福音主義者の一致の必要の認識に基づいて、行われたものであった。ドイツ及びスイスの福音主義者の結合が画策されていたという側面を、この会議の評価から、見落してはならない。残念ながら、出席者は、信仰義認等の基本的教理条項において承認できたが、第一五項聖餐の問題について当面の合意を得ることができず、「互いの良心の許す限り、キリストの愛を示し合うべきである」ということを決議したにとどまった。このことを別の見方からすれば、聖餐論においての合意こそが福音主義者の一致の要件であったわけである。

一五二四年一一月一六日の日付のある、ツウィングリからマトイス・アルベーにあてた手紙の公表以来、ルターとの間に、激しい制定辞の解釈、ひいては聖餐論の本質を巡って、論争がつづけられていた。その論争の頂点が、マールブルグ会議であった。この会議の後、ドイツ福音主義教会とスイス改革派教会の間で論争が継続され、ついに一致をみることはなかったが、両者の間が決定的に決裂したとみるのは正しくない。むしろ、協調の努力は、絶えず続けられていた。

その第一の例が、ツウィングリの側に立って、マールブルグ会議に出席した、マルティン・ブッツァーの努力である。これは一五三六年の「ヴィッテンベルグ協約」に結実する。

その第二の例がカルヴァンである。彼は、ルターの後の神学的論争の指導者となったヨアヒム・ウェストファルと聖餐論争に従事するが、この論争は不一致を見出すための論争ではなく、少なくとも、カルヴァンにとっては、ルター派教会との協調点をどこで見出すかとの観点を失っていないのである。

一五三六年という年は、以上のように、福音主義者の陣営において、希望と挫折の年であるが、この年、カルヴァンは、キリスト教綱要初版を刊行している。聖餐論争において問題となっている点を、カルヴァンが黙過する筈はない。むしろ、福音主義教会を引き裂きもし、つなぎあわせもするこの課題に取り組むのである。

（一六世紀の聖餐論争史については、筆者の牧する教会の春名純人長老に紹介していただいた Wissenschaftliche Buchgesellschaft がリプリントした、Ernst Bizer: Studien zur Geschichte des Abendmahlsstreits im 16. Jahrhundert を挙げたい。）

カルヴァンの聖餐に関する文献は、下記のものである。

一　キリスト教綱要初版（四章）　一五三六・三
二　信仰の教育（手引）　一五三七・二・一八
三　聖餐に関する信仰告白　一五三八
四　聖餐に関する小論　一五四一・九・一六
五　ジュネーブ教会信仰問答書　一五四二
六　チューリッヒ教会との聖餐に関する協定書　一五四九・八・一
七　聖礼典に関する健全にして正統なる教理の擁護――その性質、効用、限界、用法及び欠点　一五五五
八　ウェストファルの非難に対して、聖礼典に関する、敬虔正統なる信仰の弁明書　一五五六・一・五
九　ウェストファルに対する最後の勧告　一五五七
一〇　キリスト教綱要最終版　一五五九
一一　ティレマン・エスフスの散らされた庶民にあてた、聖餐においてキリストの血と肉に与ることについての聖なる教理の明解　一五六一

これらの諸論文は、その時の状況に即して力点の置き方は異なるけれども、福音主義教会を引き裂いている聖餐論争に解決を探ろうとするカルヴァンの意図を尋ねることができる。中でも、「聖餐に関する小論」は、カルヴァンの初期における聖餐論が簡潔に要約されているし、また、「キリスト教綱要」最終版は、初版からの聖餐論の基本的構造を引き継ぎながら、後のウェストファルとの論争についても要約されている。それで、この二つがカルヴァンの聖餐論を取り扱う場合に、基礎資料になると考える。

「キリストのまことの体と血が、体をなして、主の晩餐のパンとぶどう酒の中に現臨することについては、今の時、私たちの間では同意を得られなかった。」これは、マールブルグ会議における協議事項第一五項の一部である。福音主義者を、聖餐論において一致させることのできなかった問題は、聖餐におけるキリストの現臨在（リアル・プレゼンス）にあった。聖餐論における調停を試みようとすれば、この問題を解決する必要があった。

「聖餐に関する小論」において、ルターとツウィングリの両説の特徴を把握した上で、両方に批判を加えている。一致は、最大公約数的に共通項というべき教理部分を抜粋して列挙するだけではありえない。

簡単に言うと、ツウィングリは、ルターの教説にキリストの肉的現臨の残存を認めたため許しがたい偶像礼拝となしたが、

ルターはツウィングリを霊的本質の喪失した印だけ残すものと把握した。論争が始まると、反対者論破のため誇張した論法が取られたり、明瞭に語られなかったりして、論争は錯綜してしまった。

そこで、カルヴァンの批判と主張が明らかにされなければならない。カルヴァンはルターとその後継者の主張の中にある場所的現臨の立場を斥ける。カルヴァンによれば、ルター派の主張の根拠になっているのは、そのキリストの現臨在の存在方式の問題と、属性の交流という理念の問題である。前者に対して、その問題が制定辞の解釈をめぐってであることを明白にしている。パンがキリストの御体であるという文字を非常に強調して、パンはキリストの体であると信じなければならない、一歩退いても、「パンと共にパンの内に、パンの下に」と表現しても、それは文字の拘泥に他ならない。むろん、ツウィングリのように、単に象徴的に解されてもならない。そこで、カルヴァンは、制定辞が、換喩法を用いた表現であると述べる。換喩法というのは、神が「柴」においてモーセにあらわれたように、聖霊が鳩のように下ったというように、すぐれたものの名が、より劣ったものに移されたり、目にみえるしるしが、それによって意味される「ことがらそのもの」に帰されたりする表現方法である。ニーゼルのいうように、地上的エレメントは、霊的事実を確信させるため、目にみえる形で提示するだけのものではなく、事柄そのものをも差し出すのである。（ニーゼル『カルヴァンの神学』渡辺訳、三一二―三一三頁）

第二の問題について、カルヴァンは、慎重な言いまわしをしている。固有性の交流について、教父達も語っていることを承認する。しかし、ルター派、特にウェストファルの主張を取れば、多くの誤りを招いてしまう。固有性の交流の問題は、結局キリスト論の問題である。キリストは昇天後、その人性があちらこちらに遍在することはありえない。またキリストの人性を拡大して地上にまで無限に広げることはできない。フランソワ・ヴァンデルによれば、カルヴァンの聖餐論は、できるだけオリジナルなもの、つまり、できるだけ古い教理にさかのぼろうとしている。洗礼論では、アウグスチヌスをはじめ教父や、ブッツァーその他の改革者から多く引用するが、聖餐論になると、そのような引用が激減する。ここに、カルヴァンの調停者としての性格を見出す。同時代の論争の一方に加担して巻き込まれることではなく、聖書の教理に、そして古代に確立された教理に遡って議論を展開していく。渡辺信夫氏は、『カルヴァンの教会論』において、これが、カルケドン信条のキリスト論をふまえた聖餐論であると把握している。

カルヴァンにとって、キリストは、聖餐において現臨される。しかし、ルター派とは区別されて、それは、いかなる意味でも、肉的場所的及び実体的現臨でありえない。霊的現臨在でなければならない。そして、キリストは、御霊によって、たしかに現臨されるのである。

これは、当然、陪餐者が、如何にして、キリストの現臨在に与るのか、という問題に移行する。いいかえれば、キリストとの交わりの問題である。その場合、カルヴァンは、「キリストがわれわれのものとなり、われわれがキリストのものとなる」キリストと一つになる神秘的結合こそが問題なのであるという。どのような結合かは奥義であり、自然に基づいて理解できない。しかし、LECのキリスト教綱要の訳者バトルスは、カルヴァンが、この奥義を知的不可解として扱わず、説明できないが、信者の効果的変化の上にあるものという。この結合に、聖霊が重要な役割を果されると説くことによって、聖餐論と聖霊論の有機的関係が確立される。

更に、聖餐におけるキリストとの交わりの問題をめぐって、カルヴァンは、説教との関係を重視する。聖礼典は「みえる御言葉」である。御言葉とはなれては、聖礼典は正しく執行できない。これが、カルヴァンの確信であった。そして、聖礼典は、宣教そのものにとってかわることはできない。（D.S. Wallace: Calvin's Doctrine of the Word and Sacrament を挙げたい）

第二世代に属する宗教改革者としてのカルヴァンの、聖餐論における調停の試みは、妥協や政治的工作によるものではなかった。むしろ、冷静に真理を提示するより他はないとの確信の上に立ってなされている。カルヴァンが、一般的な、融通性のきかない非妥協的な神学者というイメージとは程遠いものであることを、改めて感じさせられる。

（改革派宝塚教会牧師、神戸改革派神学校講師）

ジョン・ウェスレーの聖餐論

岩本助成

一、研究の視点

J・ウェスレー（一七〇三～一七九一）は、生涯変わることなく聖餐を重要視した。彼が執行し受領した回数は驚くばかりに多い。回数の多さで事の重要性を測るのを嫌った彼だが、習慣的で他律的な受領を拒否しつつも、何故にかくまで聖餐を尊重したのか。彼を第十八世紀の英国における福音的信仰覚醒運動（the Evangelical Revival）という視点においてのみ捉えようとする者は多い。逆に彼を、礼典（殊に聖餐）覚醒運動（the Sacramental Revival）においてのみ捉えようとする試みもある。しかし問題解決の真の鍵は、両者の相互関係にのみ存する。この視点を失うと、ウェスレーと彼の運動の総体的把握、彼の神学的特質の理解も困難となろう。

二、その歴史的・神学的背景について

第十七、及び第十八世紀の英国国教会の状況、国教会内でのソサエティ活動、非国教徒の活動などが正しく概観されねばならぬ。特に、英国宗教改革者からの歴史的系譜が綿密な研究の積み重ねによって正確に辿られねばならぬ。二人の研究者に注目したい。岸田紀教授は、少なくとも初期のウェスレーは、「完全なアルミニアニズムの世紀」に生きた、アルミニアンのロード（W. Laud）派高教会主義の系譜に立つ者として、歴史的研究を続けられる。[1]（因に、アルミニアニズムに対する教会史的研究は未だ開拓すべき領域を多く持つ。英国におけるそれと、オランダにおけるそれとの混同などが指摘されている。[2]）。オックスフォード大学、Jesus College のウオルシュ（J.D. Walsh）も、ウェスレーをより広汎な、Evangelicals の史的研究から再検討しており、今後の研究成果が期待される。

ウェスレーの聖餐論形成には、熱烈な高教会アルミニアンであった両親、ロード派の高教会主義神学、教父学の研究、カロライン神学者の伝統が息づくオックスフォード大学、ひいてはモラヴィア派との接触、同派に流れる静寂主義による聖餐否定との対立など、重要な契機が存在する。又、アルダスゲート体験の評価も課題である。筆者はウェスレーの聖書的・体験的キリスト教の真実性を理解するが、同時に冒頭に述べた視点を忘れて徒に対立的、図式的理解を繰り返すことに賛同し難い。その福音的回心の明確さと共に、われわれは彼の聖餐経験がアルダスゲート以後も深化こそすれ、いささかも変化しなかった事実に注目せねばならぬ。

三、聖餐論の概観

ウェスレーは単に礼典に限らず、他の一切を見るのに、四つの規準を備えていた。第一の最も根本的な規準は、「一書の人」にして当然のことながら、聖書である。第二には理性、第三に経験、第四に古代教会の伝統、即ち、その教会実践の普遍的模範がある。まず聖餐は聖書に立証される神の制定である。ウェスレーはいかに聖書の多様な表現を用いつつ、この一事を力説したことであろうか。それは神の与えたもう恵みの手段である。又、彼自身の生活や実際の活動の中で具体的に体験し人々を指導して見て、適切と理解でき有効と判断できた。更には国教会の伝統（祈禱書、三九箇条、典礼、説教集など）を覚醒させるものでもあった。「私がこれを使うことの中に、少しの功績もない。……しかし、神が命じられるから、私はするのである。[3]」。このような典型的なプロテスタントが、その聖餐尊重のゆえに、生涯、法王派として中傷攻撃を受けたことは皮肉ではあるが、実はこの微妙な一事にこそ、問題の核心が物語られているのである。

アウグスティーヌス的表現ではあるが、「しるし」が結びつける「ことがらそのもの」とは何か。ウェスレーは「罪への死と義への新生[4]」と答えている。「しるし」は「ことがらそのもの」と同一視されないが、同時に、分離もされない。後代メソジス

トの誤解や混乱にも拘らず、彼は「しるし」をして単なる象徴と見ることに激しく反対した。

さてウェスレーの聖餐観は以下の各項に分けて検討し得る。

(1) キリストの苦難と死の「記念」として

近年、記念（アナムネーシス）の聖書的意味が解明されつつある。彼はそれが単なる歴史的出来事の想起や受難の追憶より以上のものであることを看破していた。受領者は、「今、ここで」キリストの贖罪の恵みのすべてに参与せしめられる。聖餐において過去の出来事としてのキリストの十字架が記念されるのではなく、十字架と復活の主、現臨のキリストが、礼拝の源泉と対象として仰がれるのである。それは我らのために死んで甦り給うた主の喜びの宴として守られる。

(2) 「しるし」として

物素はキリストの体と血との「しるし」であるが、現実に真の受領者に恵みを伝達する。伝達の具体的道筋は秘義に属するが、「魂の食物」「生命のパン」の力はわれわれの中に現実に生起する。

(3) 「恵みの手段」として

聖餐受領を功績化する人々及び、恵みの手段を軽視する人々とウェスレーとは対立する。それは恵みそのものの代用として魔術化されたり、恵みと分離され対立されてはならない。物素は、「現存する実在の表示のしるし」である。彼は恵みの手段を、祈り、愛餐、断食、告白、集会励行や愛の業、御言の黙想と聴従という多様性で理解したが、聖餐の中心的位置は動かなかった。

(4) 聖餐と終末論

聖餐は「来るべき王国の晩餐の型」である。又、召されし兄弟たちと共に食卓に連なることを自覚した。

(5) 聖徒の交わりとして

勝利の教会と戦闘の教会との交わりの食卓、ここに源泉を持たぬ愛の交わりも奉仕も深化しない。

(6) 犠牲として

永遠の大祭司であり犠牲であり給うキリストの自己奉献以外に犠牲はない。しかもキリストは一度かぎり、然して永遠に、神の御前に自らを献げ、それを聖餐の中でくりかえして我らに示し給う。

(7) 自己奉献として

キリストは教会を「我が体」として自己同一したもう。「キリストと共に」自らの体を奉献せずしては、我らはその体の肢としての一切をも失う。

(8) 「キリストの現在」

この点ではウェスレーはカルヴァンの解釈に近いと思われる。母スザンナとの文通に彼の理解の一端をうかがえる。彼は又、神性と人性の問題よりも、父・子・聖霊なる神の一体性により強い関心を示した。三一の神の礼典的現在を信じ、その神が受肉と十字架と復活の恵みのすべてを受領者に分ち与えられ

るとした。後代のメソジストによるウェスレーのこの観点のウィングリー的解釈は奇妙な現象と言える。彼には Dynamic Presence, Living Presence と表現し得る現在観が確立しているからである。

この他、(9) 聖餐受領者について、(10) 聖餐の奉仕者について、も考察される。

四、結論

A.C. Outler は、「メソジストは、教会論を持つか」を問い、「小さい否」と「大きな然り」とで答えている。彼らは当初、ソサエティの一員で教会形成の意図もなく、ウェスレー自身、国教会への敬愛に燃えていた。同時に、ウェスレーの教会論は深いものを持つ。更に、伝道活動や聖餐覚醒運動が具体的に教区に阻まれていた時期の「世界は我が教区なり」との一句は興味深い。一方において教会を教区を越えた世界教会として捉えつつ、他方、教区という具体的な教会や伝統を忘れ去らないからである。伝道、信仰覚醒、集団的回心などというと、教会論的展開や聖餐経験と無縁になり易い。ウェスレーは重厚な教会論を抱き、伝統的な聖餐観に立ちつつ、会衆を教会訓練と聖餐経験へと導いた。彼とその運動が単なる個人的敬虔に流れ去らなかった秘密がここにある。時あたかも三十四巻から成る「ウエスレー全集」の出版がオックスフォード大学出版部から始まった。[5] ウェスレーはその神学的オリジナリティを放ちつつ、彼に学ぶ明日の教会と神学に、主イエス・キリストの福音をより強くより深く証しする偉大な証人であり、主のしもべの一人である。

注

① 岸田紀著『ジョン・ウェズリ研究』ミネルヴァ書房、一九七七年。

② Geoffrey F. Nuttall, *The Puritan Spirit*, London: Epworth Press, pp. 67~80, Owen Chadwick, "Arminianism in England", *Religion in Life*, vol. 29, 1960, pp. 548-555, Carl Bangs, "Recent Studies in Arminianism", *Religion in Life*, vol. 32, 1963, pp. 421-428 など。

③ 『説教、上』野呂芳男訳、ウェスレー著作集刊行会、一九六一年、三三六頁。

④ *Standard Sermons*, II, pp. 237-238, cf. *Letters*, III, p. 357.

⑤ *The Works of John Wesley*, vol. 11, (ed. G.R.Cragg), London: Oxford Univ. Press, 1975 が既刊である。

（尚、この研究発表後、拙稿を大阪基督教短期大学紀要『神学と人文』第十六集に載せた。より詳細には拙論を御覧いただきたい）。

（大阪基督教短期大学助教授、図書館長）

〔書評〕

『新聖書注解』旧約第一巻「モーセ五書」

一九七六年　いのちのことば社

中沢啓介

新聖書注解も今秋出版された旧約第二巻をもって、旧・新全七巻が完結した。文字通り十年がかりの大仕事であったが、聖書信仰に立つ教会は勿論、立場を異にする教会の方々からも広く歓迎されている由、まことに御同慶にたえない。

中でも、昨秋刊行された「モーセ五書」が教会に与えている益は測り知れない。これまで日本で出版されてきた五書関係の書物は、大てい近代聖書批評学を無批判に受けいれたものか、又は、批評学の投げかけている問題に無知、あるいは無視したものがほとんどで、信仰的にも学問的にも信頼しうる書は皆無に近い状況であった。しかし、新聖書注解の「モーセ五書」は違う。聖書信仰に明確に立ちつつ、しかも批評学的課題に学的誠実さをもって答えようとしており、現代の聖書信仰に立つ教会のニードに充分応えうるものである。執筆者は、「モーセ五書緒論」が榊原康夫氏、「創世記」が舟喜信氏、「出エジプト記」が西満氏、「レビ記」が富井悠夫氏、「民数記」が田辺滋氏、「申命記」が後藤茂光氏で、いずれも本学会旧約部門で活躍中の学者達である。

この注解書は何といっても、聖書信仰に立っている、ということが最大の特色である。つまり、聖書が神の言葉である、との前提に立ち、聖書に「神の啓示としての特質」（舟喜氏）を認めつつ、歴史的・文献的研究がなされている。そのテキストの扱い方においては、「聖書自身の証言と証拠は、それが偽りであると立証されるまでは真実として受けいれるという法則」（榊原氏、三九頁）が採用される。故に、聖書信仰者と近代聖書批評学者の注解（研究）法の基本的相違は、「聖書以外の傍証のない限り、そこでは歴史的に積極的な価値を認めないか、反証がない限りそれを認めるか」（舟喜氏、六八頁）、ということにある。

われわれはこのような聖書信仰の前提と研究法こそ、近代の破壊的聖書批評学より、はるかに豊かで有効な聖書理解をもたらすもの、と確信している。事実、特に戦後の旧約学界の傾向は、これまでの聖書信仰者の主張に近づきつつある、といえよう。律法を預言者よりも前に置き、五書の歴史性をも確認しつつあるのである。

無論、右のような基本的立場は、単に伝統的見解を擁護するとか、緒論的問題や釈義において同一の結論に達する等ということを意味しない。実際、この「モーセ五書」でも執筆者の自由は最大限認められており、序言のことわり書き通り、対立

した意見もそのまま述べられている。教会の信徒の実際的使用という点からは統一していただいた方が良いとも思われるが、各執筆者の学的成果という観点から、それはそれで良いと思う。

例えば、五書の著者に関してである。緒論問題を扱われた榊原氏もモーセ著作性を信じる。しかし、それは、五書がモーセに由来する多量な資料を基にして、モーセ神学に貫かれて編集されている、という意味においてである。氏によれば、厳密な意味での著者は不明で、今日の五書の形態を取るに到ったのはダビデ・ソロモン時代である（三六頁以降）。

これに対して、五人の注解者達は、問題の取り扱い方においても、結論においても意見を異にする。舟喜氏は、モーセ以前の様々の資料伝承の存在を認め、更にモーセ以降の何世代かの活動を考慮しつつも、創世記形成に当ってのモーセの重要な役割を強調する（六四―六五頁）。他の四人は、それぞれの書が基本的にはモーセによって書かれたことを主張している。西氏は、旅行中にモーセは律法、生い立ちの記録、旅日誌等の文書を整理したであろうと推測する（二七〇頁）。又、富井氏は「モーセ以降、モーセ律法の解説、補足、拡大等がなされた可能性はあるが、その根本、基本は全体としてモーセに由来する」（四二三頁）と、田辺氏は「本書―民数記―否、五書全体の実質におけるモーセの著作性は支持され得る」（四七五頁）と、後藤氏は「筆者は、基本的にはモーセ著作を支持する。ただし、それに必要最小限度の修正や加筆がなされていることは認めるべきであると考えている」（五七一頁）と、それぞれ述べておられる。

榊原氏は、レビ記の中に多くのカナン定住後の律法が含まれていることを示唆し、「レビ記律法の解釈者はいよいよ批判的な眼を開かなくてはならないことになる」（四八頁）と、述べておられる。一方、レビ記緒論の方を見ると、著者問題はわずか七行でかたづけられ、しかも、注解の方でもそのような問題には全然ふれられていない、といった具合である。

著者問題に限らず、特定のテキストの理解の仕方にも相違が見られる。西氏が出エジプトの出来事を、聖書の中心的モチーフと捕え、創世記をその観点から位置づけるのに対し（二七四頁）、舟喜氏の創世記の位置づけはそのような発想に基づいているようには思われない。このことは、六日間の創造記事を安息日神学の視点からの記述と解する西氏の理解（三六〇頁以下）と、そのような見方に否定的である舟喜氏の解釈（七六頁）にも共通する。

又、出エジプトの人数が大きすぎる（出一二・三七、三八・二六、民一―二、六章）という問題に対しても意見の違いが見られる。西氏は種々の解決法を紹介しており（三二五―三二七頁）、又、ご自身は文字通り取っておられるようにも思えるが（四一五頁）、今ひとつはっきりしない。田辺氏は緒論では、文字通りに解釈することの困難さを指摘しながら、注解の中ではそのままとして扱っている（四七九、四八五、四九七頁等）。

これに対して、榊原氏は、後代の改訂者の手が加わっている可能性を示唆している（四八頁）。共同執筆である以上、この程度の相違は当然のことである。しかし、せっかくこの「モーセ五書」が出版されたのであるから、今後はこれをたたき台として、福音派内でのこの種の問題に対する共通理解を求めることが大切であろう。そして、立場を異にする学者達と対話をおし進めることが求められている、といえよう。

最後に、欲を言えば、注解のスタイルをもう少しそろえて頂けたらと思う。例えば、舟喜氏は学者の名をあげ、その意見を紹介又は批判しつつ筆を進めている。富井氏のそれは言葉の説明に終始しており、田辺氏のそれはテキストの流れを解説することに重点が置かれ、後藤氏のは語句の辞典的解説が前面に出ている。それに対し、西氏のは、重要な事件や問題、解釈上の難解な箇所、批評学的問題等については適宜良き解説が挿入されており、又、地図、表、挿画等がテキストの理解を助けている。

無論、創世記の注解のスタイルとレビ記のそれが同じであることは考えられないが、にもかかわらず、今少し、注解のスタイルに共通の理解があった方がよかったと思う。加えて、書名等も統一する親切さがほしかった。例えば、アアルダースの同一の書名が「五書の小緒論」（榊原氏、四九頁）、「簡略五書緒論」（舟喜氏、五八頁）、「モーセ五書概論」（西氏、二七二頁）等、執筆者によって違っているので。

福音派は、今日まで聖書批評学イコール不信者の学問ときめつけ、真面目な聖書研究の成果を評価して来なかったきらいがある。批評学的研究法に正当なる判断を下しえず、その採用に当っては未整理なところが多かった福音派内の状況においてはやむを得なかったとも思うが、この五書研究を土台として批評学的問題に対する討論が積み重ねられ、福音派内にも一定のコンセンサスみたいなものが得られるよう評者は切に願っている。その意味では、この「モーセ五書」は、教会に与えられた当面の祝福であるばかりか、未来の五書研究の出発点、又は土台石と言えよう。

（大野キリスト教会牧師）

蛭沼寿雄、秀村欣二、新見　宏、荒井　献
加納政弘　共著
『原典新約時代史――ギリシャ、ローマ、
エジプト、ユダヤの史料による――』
一九七六年　山本書店

山口　昇

聖書は書物の中の書物と言われ、今日でも依然としてベスト・セラーであることを誇っている。そのすばらしさは、当時の他

の文書と比較してみるときに明らかにされる。また、聖書は啓示の書であるが、それは歴史という背景の中で啓示されたのである。それゆえ、聖書をより良く理解するためには、聖書の背景となっている時代の歴史を理解することが重要な要素となる。

本書はこれらの点をふまえて、新約聖書に関して、紀元一世紀を中心にした種々の歴史的文献から抜粋し、編集をした、一種の文書史料集である。本書の標題からするなら、史料をもとにした、新約聖書の時代史が予想されるが、「原典」ということばが加えられることによって、単なる歴史的叙述ではないということは想像できる。元来、本書はその序文によれば、Barrett, C.K., The New Testament Background: Selected Documents, London: S.P.C.K., 1956. に着目し、その日本版を作ろうとしたところに源を発している。したがって文書史料集であるという性格が支配的である。この点をもう少し標題において明らかにしておいた方が良かったのではなかろうか。「原典」というのは、これらの資料がヘブル語、ギリシャ語、ラテン語であるのを、重訳ではなく、直接原語から訳したということによるのである。編者のことばによれば、「本書は実は、新約聖書をこのようなオイクメネーのパノラマの中において、全景的に、立体的に、見るための資料を提供することを目指している」のであり、「当時の他の文献、特に宗教文献と比較することにより、新約聖書そのものがより明確に浮彫りにされ、同時に、他のものもいっそう明瞭に把握される。本書はこのためにも必要と思われる」と述べられている（序:iページ）。

本書の内容は大別すれば、前後二篇に分けられ、最後に付録が付けられている。各篇は最初に総説があり、次に個々の資料とその簡単な解説、さらに本文の訳とかなり詳細な注が加えられている。

まず、第一篇は「ヘレニズム＝ローマ世界」であり、総説として、「ヘレニズム＝ローマ世界の概観」が、アレクサンドロス大王以後、紀元一世紀末までの歴史的概観を述べている。資料および解説の部分では、

一　ローマ帝国

アウグストゥス、ティベリウス、ガイウス（カリグラ）、クラウディウス、ネロ、内乱からドミティアヌスまで。

二　金石文と貨幣の刻文

金石文としては、異邦人が神殿の内庭に入ることを禁止した、神殿碑文、パウロのコリント滞在の年代、ひいてはパウロの生涯の年代決定の基準となる、デルポイのガリオ碑文、貨幣ではデナリ、レプタ、ドラクマなど新約においてもなじみの深い貨幣と思われるものが表裏の図とともに刻文が示されていて、興味深い。

三　パピルス文書

ここでは、オクシリンコス・パピルスをはじめとする多くのパピルスの中から選ばれた、資料によって、パピルスの作成と使用、パピルス書簡の形成と文体から始め、魔術、宗教関係、

社会的、経済的関係、キリスト教関係の歴史的背景を示し、さらに羊皮紙とオストラカについての説明を加えている。特にパピルス文書に対する注においては、それぞれのギリシャ語を新約聖書のギリシャ語の用例と関連させながら述べているところに、読者に対する親切さが見られる。

四　哲学

ここではセネカ、エピクテートス、マルクス・アウレリウス、プルタルコスなどの文書により、後期ストア派を中心とし、中期プラトン主義、新ピタゴラス派などの哲学思想が述べられている。

五　宗教

ここではシリヤの女神の祭り、イーシスの宗教、ミトラ教などについて述べて、その資料が上げられている。いわゆる宗教史学派は、これらの宗教がパウロ神学に与えた影響を強調しているが、資料が少ないので、この点はあまり明確にされていない。

六　グノーシス主義

これは新約聖書と関係の深いものであるが、ユスティノス、エイレーナイオス、などの護教家の文書に見られるグノーシス主義と、ナグハマディ文書に見られるグノーシス主義が取り上げられている。

後半の第二篇は、新約時代のユダヤを取り上げており、総説の「新約時代のユダヤの概況」では、エズラの指導下にユダヤ人が捕囚から帰還するところから始まり、マカベヤ戦争とハスモン王朝を経て、ヘロデの支配、ユダヤ戦争を述べた後に、ユダヤ教の形成、終末観とメシヤ思想にふれ、最後にバル・コクバの反乱に言及して結ばれている。

続いて、資料および解説の部分は全体が次の七部に分けられている。

一　ユダヤ史

ここではマカベヤ書とヨセフスの文書を中心にして、マカベヤ時代、大祭司、総督たち、パリサイ、サドカイ、エッセネの各派、ユダヤ戦争、バル・コクバの反乱、ディアスポラのユダヤ人などを取り扱っている。このあたりは中間時代から新約時代にわたるユダヤの社会生活と宗教的分派が史料を通して知られ、新約聖書と最も関係の深いところである。

二　ラビ文学とラビ・ユダヤ教

ここではミシュナーやミドラシュからの豊富な引用により、ラビたち、その文学、教え、祝祭、会堂、祈禱、ハーベールとアム・ハーアーレツ、改宗者、ミーン、教理、裁判手続について述べている。ユダヤ教は新約聖書を理解するのに不可欠な要素であるが、約九十ページにわたるこの部分を読むことによって、ユダヤ教についての概略がわかるので、大変便利である。

三　フィローン

フィローンの思想は彼のロゴス論や寓喩的解釈に興味深いものがあり、新約聖書とも関係が深いが、要約された資料の中に、それをよくまとめている。

四　ヨセフス

ここでは、彼の伝記に関する資料、洗礼者ヨハネ、イエス、イエスの兄弟ヤコブについての彼の証言、その他が含まれている。ヨセフスの『ユダヤ戦記』および『ユダヤ古代誌』は前出のユダヤ史の項目の中でも、しばしば引用されている重要な資料である。ここでは筆者ヨセフスに関することが述べられるべきであり、その点では、この項目の中の「洗礼者ヨハネ、イエス、イエスの兄弟ヤコブについてのヨセフスの証言」は、分類上は前出の「ユダヤ史」の項目の中に含まれるべきではなかろうか。

五　セプトゥアギンタ（七十人訳聖書）

ここでは七十人訳の起源に関する伝承と、七十人訳に含まれている旧約外典から、神の知恵、道徳的訓話、殉教と来世の思想についての引用をしている。

六　黙示文学

ここでは、黙示文学の文学形式を示す資料と、黙示文学の主要概念を示す資料が上げられている。ここに引用されている資料は要領よく選択されていて良いのだが、二つの世、審判と神の国、メシヤ出現に際しての患難、人の子、など黙示文学の主要概念は、新約聖書とも関連のある重要な問題であり、新約神学でも論議されるところなので、もう少し解説の部分に紙数を割いてほしかったという感がする。

七　クムラン文書

ここではクムラン宗団の実態を伝える資料と、思想を伝える資料を最小限にしぼって引用している。これは同じ出版社から『死海文書』が出されているので詳細はそれを参照すればよい。

最後に付録は資料年表、系図、索引からなっている。資料年表は資料の成立した年代とその当時の歴史を結びつけた一覧表である。年代決定の困難なものもあるが、大体において穏当なものと言えよう。しかし編著者が批評的立場の学者なので、ダニエル書や、新約の各書の中には、われわれの側からは納得のいかないものがある。系図には、ローマ皇帝の系図、ラビ系統図、ヘロデ家系図があり、いずれも便利である。

とに角、全体で約八百ページにも及ぶ大冊であり、労作である。他に類書がないので良い企画である。ただ、序文でことわってあるが、ここまで網羅的にするのなら、使徒後教父の文書、および新約外典も含めてほしかった。

各項目の解説は啓蒙的で、なかなか好感のもてる記述をしている。しかし、標題が『時代史』なのであるから、資料の部分に対する紙数の比率から言って、もう少し時代史的要素が表現できるように総説の記述にもっと紙数を与えてほしかった。

総説のユダヤの概況の最後のところに、バル・コクバについての参考文献が紹介されているが、他の項目についても好学の士のために参考文献を紹介してくれたなら良かったと思う。

新約聖書の理解がより深められるために、座右に置きたい書である。編著者らの労を多としたい。

（聖書神学舎講師）

W.L. Lane, Commentary on the Gospel of Mark, New International Commentary on the New Testament 2 (Grand Rapids: Eerdmans, 1974), xvi and 652 pp.

宮村武夫

本書は、ニュー・インターナショナル・コメンタリーの、ルカの福音書、ヨハネの福音書に続く第三冊目の福音書注解書として出版された六百頁を越すもので、本注解書シリーズの良き伝統を継承しており、方法論及び注解の実際の両面にわたり示唆するところ多い著作である。

著者ウィリアム・レインは、ゴードン神学校、ウェストミンスター神学校、ハーバード大学、ヘブル・ユニオン・カレッヂ（シンシナチ）、ルンド大学などで学び、ゴードン神学校、ゴードン・コンウェル神学校で近年まで教えてきた比較的若い世代に属する学者で、"I Tim. iv. 1-3. An Early Instance of Over-realized Eschatology?" N T Study II (2, '65) 164-167. "Redactionsgeschichte and the De-historicizing of the New Testament Gospel," Bull Evang Theol Soc II (1, '68) 27-33. "A Critique of Purportedly Authentic Agrapha," Journ Evang Theol Soc 18 (1, '75) 29-35 などの諸論文、また一九六九年に出版されたゴードン・コンウェルの同僚とのユニークな入門書、*The New Testament Speaks* (New York, Harper & Row) を通し、その学識と明解な表現力で知られている。

著者は、序文（xi～xiii）の中で、処女作とも言える本注解書の由来を明かしている。一九六一年秋、本注解書シリーズの前編集主幹であった故ストンハウス教授が、当時未だ博士論文を完了していなかった弱年の著者を、マルコの福音書注解者として招き、教授自身がマタイの福音書の注解を書き続ける過程で著者と定期的に会合し、指導することを約束した。しかし師の召天によりこれは実現に至らなかったのであるが、その後十年にわたる著者の成長とともに、本注解書も徐々に成熟し、最終的にはルンドにおいてスカンジナビアの福音書研究に直接触れる中で書きあげたという。

さて、著者は、本注解書のための研鑽と執筆にあたり意図した三つの目標を明示しているが（xi、xii）、これは本注解書味読のため有用な鍵である。

(1)常に新しく、第一義的に聖書本文に忠実に従い、イエスこそメシア、神の子である事実を、マルコ自身が独自な証人として宣言するのを聞く。この際、マルコの記録を他の共観福音書と調和させようとする余り、マルコの声を聞き損なわないように留意し、マルコ特有の観点に十分注意を払う。このテキストの下に立ち、テキストに聞く者としての自覚と実践は、本注解書シ

リーズの編集主幹F・F・ブルースも認めているように(ix)、評価すべき本書の特徴である。

(2)マルコの福音書の成立を促した具体的状況を再構成するにあたり、テキストがマルコの同時代人にいかに読まれたかの探求に努力する。そして、マルコ福音書の最初の読者であると見なされるローマのキリスト者に対するマルコの牧会的配慮が、この福音書の特別な強調点や構造に重要な影響を及ぼしていると著者は考えるのである。

(3)現代における福音書研究の背景の中に、自らのマルコの福音書の学びを位置づけようとし、脚注で様々の立場の学術書、さらに学術論文を広範囲にわたり検討して行く。この詳細にわたる注も、マルコ特有の証言の全体像を提示して行くため、本注解書の不可分な構成要素であると著者は確信している。こうして、専門家でない本書の読者が、各専門分野にわたる諸論文の研究成果を批判的に、しかも積極的に用いる助けをしたい、これが著者の意図なのである。

上記のような目標を定め、具体的テキストを注解して行くにあたり、その土台となる事柄を、著者は三八頁に渡る緒論において展開している。これは、著者の聖書解釈の方法論の提示であり、次のような項目を含む。

(1)マルコの福音書研究の新傾向（3—7頁）
(2)本福音書に関する伝承（7—12頁）
(3)本福音書の執筆状況（12—17頁）
(4)本福音書の執筆年代（17—21頁）
(5)本福音書の著者（21—23頁）
(6)本福音書の執筆場所（24、25頁）
(7)文体及び文学的方法に関する諸考察（25—28頁）
(8)マルコの福音書の分析（29—32頁）
(9)参考文献（32—38頁）

著者の主張の要点は、以下の通りである。

(1)著者は、マルコの福音書研究の歩みを手短かに述べた後、W・マルクスセンの提唱する編集史的方法を検討し、様式史に根ざすマルクスセンの前提と方法論そのものとを区別しようとする。著者は、マルクスセンの前提の中に非歴史化の傾向を見（著者の論文 "Redactionsgeschichte and the De-historicizing of the New Testament Gospel," Bull Evang Theol Soc II (1, '68) 27-33. 参照)、歴史における神の力強い働きに関する旧約聖書の証言と神の受肉をめぐる中心的真理を曖昧にすると批判する。歴史的事実の神学的重要性を注意すべきであると同時に、神学的意味は、歴史的出来事に基づいている面も認めるべきなのである。結局、イエスをメシア、神の子と証言する文書を生み、根本的統一性を与えているのは、福音書記者でも教会でもなく、イエス・キリストの創造的生涯なのであると著者は確信している。

(2)伝承と最近の研究の両方を十分比較検討し、福音書記者の役割を、独自の歴史家、神学者として高く評価する。

(3)著者は、本福音書を、紀元六四年後の危機的状況のもとに生きるローマのキリスト者に対する牧会的配慮から書かれたものとみなし、本福音書の特徴は、この状況と深く係わると主張している。

(5)マルコは、自らの第一義的使命は、激しい試練の中に生きる人々を励まし強めることにあるのを決して忘れない第一級の神学者、牧会者である。著者は本福音書の内的証拠からこの点は明白であると考えている。

(7)この部分は、本福音書の特徴を最もよく示す、重要な箇所である。福音書記者マルコは、最初の読者たちが生きている危機的状況の中で、現に今意味深く語り、活動し続けておられるイエス・キリストを提示するため、伝承を選択し、本福音書を構成したのである。生ける主が聞かれ、知られるようにとの意図に従い、単純明解な文章の構造、並列、直接話法、歴史的現在など文学的方法が用いられている。こうして本福音書全体を通じ、主イエスはご自身の臨在と権威を民の間に明らかにし続けておられるのである。たとえば、挿入句（7：19、13：37）や修辞的疑問形（4：41）など文学的趣向を用い、読者を単なる第三者的立場ではなく、主イエスが立たれ、現に福音書記者が立っている場にともに立つよう招いているとレイン教授は例示している。このようにマルコが用いている多様の福音書の文学的記述とイエスをメシア・神の子と告白する信仰共同体としての教会に参与するよう読者に勧告する福音の教師、伝道者としてのマルコのメッセージの間に生きた関係を見い出して行く、これが著者が本注解書で一貫して実行していることなのである。

次に、著者の注解の実例として十三章を見たい。著者は、十三章の注解のためかなりの分量（444～484頁）を割き、この困難な箇所の構造と内容に集中しながら意味を汲み取り、説得力のある仕方で表現して行く。まず十三章が本福音書の中で特別な位置を占めていることを注意する。つまり、神殿の当局との激突（11：11～12：12）において頂点に達した主イエスの公の宣教活動と受難の記事の間の橋渡しの役割を十三章は果している。終末論的記事をこのような重大な場所に位置づけ、神殿の破壊についての言及を主イエスの裁判の遂行の文脈の中で繰り返すことにより（14：58、15：29、39）、マルコはエルサレムの審判と主イエスの死の間に存在する関係を指摘していると著者は見、この神学的理解が、5～37節の告別説教という文学的形式に反映していると判断している。

また著者は、「気をつけなさい」（5、9、23、33）ということばを手掛りに、この部分を理解すべきであると提唱する。つまり、5節に見る神殿崩壊をめぐる弟子の質問に対し、答えの初めに、様々なことが起っても終りが到来したと惑わされてはならないと主イエスは勧告する。また9節では、弟子たち自身が直面する苦悩に関する言及との係わりで、同じ警告を繰り返し、迫害は、終りの来たことや希望を失うことを意味せず、こ

の時こそ諸国民への宣教の機会なのであると教えておられる。さらに14節から23節の部分では、恐ろしい冒瀆、大かん難、にせメシアや、にせ預言者に直面する中で、神の民は惑わされないように気をつける必要がある。パルーシヤについての記述（24～27）、その時についての教え（28～32）に続く最後の譬も、「気をつけなさい」との勧告のことばで始まっている。このように勧告のことばを手掛りに、黙示文学的記述が孤立しているのではなく、勧告の理由を提示するためのものであることを著者は明示する。13章の第一義的役割は、奥義的な報告を与えるためではなく、苦悩と激変の中で堅く信仰に立ち、耐え忍ぶように勧告することである。この説教では、復活と主の再臨の間に歴史的な発展を明らかに前提し、この期間に生きる読者をはじめ、キリストの教会は、キリストの招きに従順に従い、十字架を背負い進むことを教えている。

さらに、この部分の構造分析の手掛りとして、「そういうこと」ということばに注意を払うべきであると著者は提唱する。4節に見る「そういうこと……それがみな」に関する弟子の質問に対し、主イエスは、覚悟すべき苦悩（5～23）と試練の期間を終結させる最終的勝利（24～27）を宣言をなさっている。その際、救いの突入に先立つ歴史的出来事の描写の結論として、23節で「わたしは、何もかも前もって話しました」と警告を与えている。この警告は、4節の質問と関係する。24～27節の再臨の描写に続き、29、30節において再び「これらのこと」と繰り返している。これは、4節及び23節と結び付き、24、25節の宇宙的崩壊に関する直接の言及ではないとレイン教授は判断する。それ故、29節の「これらのこと」は、5～23節、特に14～23節についての言及なのである。主イエスの警告の中心は、これらの前段階の出来事を、終末が到来した証拠と誤解しないようにというものである。主イエスと同時代の世代において成就する事柄（30節）は、前段階の出来事だけであり、それらの事柄が成就しなければ、その時を神のみが知り給う（32節）主イエスの再臨はありえない。弟子たちは、前段階的なしるしにより混乱し、終末そのものと混同してはならない。目をさまし、注意すべきなのである。この使命は、元来主イエスの直接の弟子たちの使命なのであるが、本福音書の最初の読者であるローマのキリスト者共同体全体の責任であるとマルコは強調している、これがレイン教授の理解なのである（484頁）。十三章は、単に主イエスの再臨という一点だけが問題になっているのではない。にせ教師、迫害など内外の苦難、主の再臨が遅れているように見える状況の中で、実に確実な主の再臨の希望を見て生きて行く、断続的な教会の生活全体も問題となっている、これが著者の十三章の注解から学ぶ中心点であろう。

十年の年月を費やし、百五十冊以上に及ぶ参考文献と無数の学術論文の検討から生れた本書は、確かに示唆するところ多い著書である。

（新約教団青梅キリスト教会牧師）

H. Berkhof. Christelijk Geloof.
Callenbach. Nijkerk. Tweede druk 1974. 596 pp.

橋本龍三

H・ベルコフの著作を取り上げるのは、その著作が既に三冊邦訳され、わが国の教界に親しまれている神学者であるからである。H・ベルコフは、オランダ最大の改革派教会、NHK（旧国教会）を代表する神学者である。彼はまたWCCや、長老、改革派教会世界同盟において主要な役割を果してきた神学者でもあり、その著作は、日本語だけではなく、英語、ドイツ語に多数翻訳されている。NHKの神学校であるオランダ・ドリーベルヘン神学校校長を経て、レイデン大学神学部教授を長くつとめてきている。ヘッセリング教授は、H・ベルコフを、途上の神学者として紹介したが（『キリスト教組織神学辞典』東京神学大学神学会編、オランダ神学の項参照）、既に六十三才、本書はベルコフ教授の Opus Magnum と言われ、今世紀後半に刊行された最も優れた教義学教本として定評を得ている。興味深いことは、本書に対するレスポンスが書物として刊行されており、ベルカワー、フェレマ、カイテルト、スヒレベーク、モルトマン、ジェームズバー等二〇名を越える神学者の評価が収録されていることである（Weerwoord. reactie op Dr. H. Berkhof's Christelijk Geloof）。

このことは、H・ベルコフの神学者としての偉大さとその影響の範囲の広さを示している。彼は、エキュメニカルを代表する神学者であり、世界の神学者との対話の中で神学してきたユニークな神学者である。ファン・デン・フーフェルは、それらの神学者の中に、日本の北森教授、竹中教授をも挙げている。しかし、何といっても、H・ベルコフが最も影響を受けているのはK・バルトであることは明白である。

序文の中で、H・ベルコフは、本書の意図を、外側の人々に福音を伝達する弁証的意図に動機づけられていることを語っているが、そのために、一般読者には大文字で概観を示し、特に神学者には小文字で詳細にわたる議論を加えている。本書の構成は、次の如きものであり、その中にもベルコフ神学のユニークな面を見ることができよう。まず序論として、一、プロレゴーメナ、二、宗教、三、信仰、四、キリスト教信仰、五、キリスト教信仰教理、動機と本質、六、キリスト教信仰教理、照準と限界。次に啓示論に入り、七、内的プロレゴーメナ、八、啓示、現象学的と神学的、九、啓示の種類、一〇、啓示と神秘、一一、啓示の二重性、御言と御霊、一二、歴史としての啓示、一三、啓示の象徴的言語、一四、自己啓示か諸真理の啓示か、一五、一般啓示と特別啓示、一六、聖書と聖伝、一七、啓示の進展。第三に神論に入り、一八、啓示と本質、一九、本質

と属性、二〇、聖なる愛、二一、無防御の大能、二二、可変的真実、第四の創造論では、二三、創造者としての神、二四、被造物としての世界、二五、人間、愛と自由、二六、人間、罪と運命、二七、世界の保持、ここで第五番目に、イスラエル論が挿入される。二八、キリスト教信仰におけるイスラエル、二九、旧約におけるイスラエルの道、三〇、新約におけるイスラエルの道、第六にキリスト論が来る。三一、歴史的イエスの探究、三二、人格性、三三、その生と人間性、三四、その死と和解、三五、復活と栄化、三六、聖霊とその分与、三七、三一性としての契約。次に、個別的救拯論に先立って、集合的救拯論として教会論（新しい交わり）の章が来る。三八、交わりとしての契約、三九、組織としての教会、四〇、キリストの身体としての教会、四一、長子としての神の民、次に人間の新生と題して救拯論が来る。四二、神の目的としての人間、四四、義認と信仰、四六、義認と聖化、四七、自由と愛、四八、死と復活、四九、戦い、進展と保持、五〇、新生の完了、五一、祈禱、更に後に、世界の新生と万物更新の部が続く。五二、信仰における世の位置、五三、世の聖化、五四、進展と戦い、五五、葛藤と勝利、五六、キリストと聖霊と未来、人間、人類と未来、五八、永遠の生命。以上、五十八章が本書の構成である。教会論が救拯論に先行する点、終末論、キリスト来臨以前と以後に分けて、ポストミレの理解において現在の世界史が捉えられている点が注目されよう。

先に述べた通り、ベルコフは改革派の伝統の中で教義学を構成しているが、その構成だけでなく内容においても、新しい要因を見ることができる。いくつかの点を指摘しておこう。第一にその啓示理解を指摘しなければならない。彼は「啓示は出会いの出来事（ontmoetingsgebeuren）である」（五九頁）と語る。神と人間とのかかわりあい、これがベルコフ神学の鍵となっている。彼は、啓示を神と人間の出会いの出来事と理解することによって、神と人間に同様の位置を与えている。勿論、神のイニシャティヴについて語られる。そこでは、啓示が神の一方的な行為、神の行為として明確に規定されない。神と人間が二つのパートナーとして関係をもつものと考えられている。それ故、ベルコフは、啓示を神のみの行為とする思想（de allen werkzaamheid van God）を極端なプロテスタントの立場として排除する。しかし、これは、明らかに改革者の立場であり、ベルコフの立場は、啓示論におけるセミ・ペラギアンの立場と言わざるを得ない。彼は、Sola gratia を強調するが、出会いの出来事としての啓示理解は、それとの調和を不可能にしている。神は人間を啓示の手段として用いたもうが、啓示は人間と神の出会いの出来事として生起するものではない。

ベルコフは、更に、啓示を、出会いの出来事とその解釈の累積的プロセスと定義する（六五頁以下）。啓示の出会いの出来事は、歴史における神の行為の出来事として人間の行為と経験の中で遂行されていくものとされる。しかし、それは、歴史に

おいて一般史の出来事としても生起するものである。ベルコフの、プロセスとしての神啓示理解は、モルトマン、パネンベルグの啓示理解と通ずるものを持つ。それは、神の御言啓示の独自性に暗い影を投げかけるものである。御言は歴史に埋没することはない。それは歴史において生起するものであるが、歴史と軌を一にするものではない。神の言は、出会いの出来事の解釈、あるいは証言ではなく、それ自体が啓示なのである。

ベルコフは啓示をプロセスとして考える。その本質は進展的（evolutief）なものである。そのプロセスにおいて行為なしたもう神が歴史を導きたもう。それが聖霊なのである（三四八頁以下）。そのプロセスにおいて、神と人間はパートナーとして共に歩む。それがイエス・キリストである。この啓示のプロセスにおいて、神は、主権的愛においてこのように変化するものとなりたもうた。ベルコフはここに三一論を見る。これは、古典的本体論的三一論に対する拒絶に他ならない。彼は、位格としての神の御子、御霊そして御父について語らない。換言すれば神の本質の三位格としてのペルソナについて語らない。神的位格の固有な人格的存在は、神が人間と共に参与する進展的歴史の過程の記号的存在（chiffrezijn）であり、従って、聖霊は、われわれのもとにいましたもう神の御活動の別名に他ならない（三四三頁）。この聖霊の働きは、歴史に分与する出来事として特徴づけられる。このような三一論の構造は、モードス・モナルキア主義、あるいはサベリウス主義の三一論に近似するものといわざるを得ないであろう。

キリスト論においても、この啓示論の構造の枠組の中で論じられている。キリストは、神の目的としたもう人間性の根元である。ここにベルコフのキリスト論の特有性がある。キリストは、神の新しい創造行為であるといわれる（二九八頁）。しかし、それは、キリストの行為に関係するのであって、その人格性に関係するものではない。歴史におけるキリストの出来事の最も深い意味は、神と人間が共存したことにある（三〇三頁）。

キリストにおいて、人間と神は共に歴史を歩む。そこでキリストは規範的ではあるが、決定的ではない。それ故、キリスト信仰も、救いのために決定的なものではない。信仰は神と人間の歴史における協同に参与するものである。しかし御霊はキリスト信仰の外側にも働くのである（五二九頁、五五三頁）。ここから、ユトレヒトのフラーフランドが、ベルコフにとって救いとは人間性（humaniteit）に他ならないと考察することも誤ってはいない。従って、キリストの和解の業における代替性、義認の法的性格は悉く排除されるのである。所詮、ベルコフはバルトの万人救済主義を批判し続けるけれども、彼自身、別の形の万人救済主義に陥らざるを得ないのではなかろうか。それは彼の終末論にあらわれる。詳細は紹介できないが、彼の地獄理解についての言葉がそれを示しているといえよう。即ち、地獄について「神の名においてわれわれは、地獄が浄化への道であることを希望する」（五五四頁）と述べている。多くの難点

があるにせよ、ベルコフは、五〇〇頁余りの書に、教義学の全問題を明晰な論理で、現代的視点から新しい展開を示した。その手法は天才的である。立場はともかく、今日の教会が求めている教義学教本の典型として注目に価すると思う。我が国においてもこのような形の教義学教本が待望される。

（神戸改革派神学校校長）

G.C. Berkouwer

The Church. Translated by J.E. Davison.

Eerdmans. Grand Rapids. 438 pp. 1976.

橋本龍三

本書は、ベルカワー教授の教義学研究第十四巻である。（オランダ語原著では第十七巻、十八巻に当る）当初の計画では、更に四巻（創造、聖霊、神の国、神の契約）が刊行されることになっているが、この教会論の刊行をもって一応ベルカワー神学の全体的構造が明らかになったと言ってよい。本書が刊行された後に、『ベルカワー博士の神学—その構造分析』（G.W. de Jong）と題する書物の刊行を見るに到ったこともゆえなしとしない。その意味で、本書と一九七四年に刊行され、本年には英訳の刊行を見るに到った『神学の半世紀』（Een Halve Eeuw Theologie）の両書は、ベルカワー神学のしめくくりとして重要な意義を持つものと言えよう。

本書は、単にベルカワー神学に関心をもつもの、教義学に関心をもつものにとってだけではなく、福音主義神学に立つすべての教職にとって有益な書物であると言えよう。本書が、福音主義の立場に立つ本格的教会論として、最も注目さるべき書物であるからに他ならない。

ベルカワーの教会論は、本書と既に刊行された『礼典』（一九五四年）と、将来刊行予定の『神の国』の三部から成り立つものであるから、本書は彼の教会論の一部である。既に刊行された『礼典』と、この『教会』だけでも、原著で千頁近い大著であり、これに『神の国』が加われば実に膨大な教会論になる訳である。

今世紀は「教会の世紀」（オットー・ディベリウス）と言われる。今世紀前半のバルメン教会闘争と、後半のエキュメニカル運動という具体的動きの中にあって、特に、欧州の教会は、「教会論」の再検討と再建を迫られて来た。それに、最近の急速な世俗化に伴う非キリスト教化、脱教会化のなだれ現象に直面して、教会論の現代的展開は、緊急の課題となってきているのである。

米国教会の影響を強く受けてきている日本の教会は、所謂、デノミネーショナリズムを当然なこととして受容れる空気が強

く、教会意識は極めて貧困である。福音派諸教会の今後の課題の一つとして、健全で強固な教会論の構築にあるということは屢々指摘せられてきた。『福音主義神学』の読者に特にタイムリーな書物として一読をおすすめしたいと思う。

本書は、これまでの教会論の通常の取り上げ方とは異って、教会の四属性、即ち、一致性、公同性、使徒性、聖性を中心に展開されている。正統派の教会論が、教会の本質論に固執し、自由派は、教会の機能論を本質論にすり代える傾向が強いのが現状であるが、ベルカワーの教会論は、本質論と機能論を適度のバランスの上に調和させながら議論をすすめているので、本書は、教義学に関心をもつ読者ばかりでなく、実践神学に関心をもつ読者層にも魅力ある内容のものとなっている。

ベルカワーは、教会の四属性について論じるに先立って、credo ecclesiam 即ち、教会信仰の問題を取り上げる。使徒信条において、われわれは、聖なる公同の教会を信ず、と告白する。教会は信仰の対象である。この教会は、理念化された教会ではないし、終末において完成を見る教会でもなく、現実に、われわれがその一員である教会である。教会信仰は、あくまで、具体的にこの地上に存在する、エンピリカルな教会に対する信仰なのである。ベルカワーは、一貫して、この点を強調する。教会の属性を取り上げる場合にも、その一致、公同性、使徒性、聖性は、凡て、現実の教会について言われていることなのである。教会は、特に、一致性と聖性について批判の前に立たされる。現実の不一致と欠陥は屢々、教会の不可見的局面、終末的局面という見地から、可見教会、戦闘の教会の制約として容認される。しかし、ベルカワーは、あくまで、現実の地上教会の属性としてこの四属性を取り上げる。この属性の数について、使徒性を除外する者、不可侵性を加える者と、一致は見られない。その数は確定的なものではないし、その各々は不可分離的に関係しており、優先的順位を決定しうるものでもないと主張される。しかし、これらの属性の故に教会が存在すると考え、教会の属性こそ教会の記号（notae）と主張するロマ教会に対して、改革者は、属性とは別個に、教会の真偽を判定する規準として notae を規定し、御言と礼典、更には戒規にそれを見出したことは、新しい教会論の導入であり、静的な教会論に対する動的な教会論の導入であったと言われる。

しかし、ベルカワーが第一に取り上げるのは教会の一致である。ベルカワーは教会の分裂を教会の属性として容認することは許されないという。教会の一致は決して終末論的に理解されるものではなく、あくまで現在的一致を指向するものとして考えられなければならない。教会の不一致、分裂は、理解しえないことであり、教会において無縁な（alienum）事柄である。カルヴァンの有名な言葉に表現されているように、「キリストが幾つにも細分されたまわぬ限り—そして、それは実現不可能なことである—二種あるいは三種の教会を考え出すことはできない」のである。「教会がその存在を宣教において、一致を保つ

ことにおいてのみ、この世で、また、この世に対して実りをもちうるのである」（四九頁）。

教会が分れている状態を肯定的に理解するために教会の多形態性（Pluriformiteit）の概念が導入されてきたことはよく知られている。アブラハム・カイパーは、この多形態性を、福音の主体的理解の多様性に訴え、そこから、生ずる諸教会の交わりを肯定しようとしたが、ベルカワーは、福音の主体的理解の多様性の容認が、福音の多形態性の容認に道を開くことを懸念している。むしろ、歴史の教訓は、理念の多様性が、一致と交わりに対する召命を強くするものに他ならないと考える。

このような一致と交わりを強調する教会理念は、当然、教会の境界線の問題、教会の内側と外側の問題にわれわれを直面させるのである。キプリアヌスの有名な命題である「教会の外に救はない」（extra ecclesiam nulla salus）をどのように理解すべきであるか。問題は、この命題は、カルヴァンにおいても継承されており、ウェストミンスター信条においても明白に告白されていることである（第二十五章）。ロマ・カトリックの神学者であるハンス・キュンクは、この extra ecclesiam を、extra Christum と改めるべきことを主張する。しかし、ベルカワーは、プロテスタント神学において、この命題は、決して、組織としての教会と関係して決定的に、排他的に語られているのではなく、教会と共に、キリストに従い、キリストに仕えるという召命の脈絡の中で理解されるべきであって、extra Christum に置換える必要はないと考える。

教会の境界線、内と外の関係性は、教会の聖性と関連しても問題とされている。特に、最終章「教会とミッション」はその意味で興味深い。ベルカワーは、教会と世との区別は、教会が世とかかわりあいをもたないことを意味しないと語り、むしろ教会の遠心的契機（entrifugal motive）を強調する。それは決して第二義的なものではない。教会のミッションは、教会の健全な状態に何かを付加するものといったものではなく、教会の存在、教会の生命そのものにかかわるものである。特に、教会の聖性―分離―の理念を根拠に、教会の外側に向っての運動が繰り返し考察される必要性を訴える。この運動無くして、教会は真の教会たりえないのである。

ミッションの問題は、その動機の問題と同時に、目的の問題が考えられなければならない。ミッションの動機が、個人主義的（個人の回心）なものか、集団主義的（教会の形成）なものかは、長く論争されてきている点である。これは、伝道派と教会派の対立という形でわが国の教会にも現存する争点である。ベルカワーは、plantatio ecclesiae（教会設立）の動機は、必ずしも、教会主義に結びつかないのであって、教会の形成は、教会の外側への動きの中に最初から含まれている事柄と考える。ミッションと教会形成は対立する契機として考えられてはならないのである。

ベルカワーは、オランダの改革派教会の中で二番目に大きい

GKNを代表する神学者である。GKNはWCCに加入して以来、ベルカワー自身、急速に諸教会と対話への傾向を強めてきている。本書では、更に、世界の諸宗教との対話の必要性を訴えているが、それは、決して、キリスト教の絶対性に対する譲歩に由来する発言ではなく、福音の力と主の臨在の確信に基づく積極的な姿勢を示す発言である。教会の未来に関する敗北主義以上に危険なものはないと警告するのもそのために他ならない。米国南部バプテスト神学校のディム・ムーディ教授は、「ベルカワーは、今日の最もすぐれた神学者の一人であり、彼を無視する神学徒は賢明ではない」とコメントしているが、本書に関しては特にこの言葉がふさわしいと思う。

（神戸改革派神学校校長）

テオドール・ド・ベーズ著　田中剛二訳

『ジャン・カルヴァンの生涯』

現代とキリスト教小論叢書第八号

一九七六年　日本基督改革派教会

西部中会文書委員会

丸山忠孝

ジュネーヴの宗教改革者ジャン・カルヴァンの後継者であったベーズの名を冠するカルヴァン伝には三種類がある。

第一は、ベーズが一五六四年五月のカルヴァンの死後三ケ月を経ずして書き上げたフランス語初版である。カルヴァンの『ヨシュア記註解書』の前文として出版されたこの小品は、ベーズが父とも師とも尊敬していた改革者の死からあまりにも時間的に隔たっていなかったためであろうか、まとまった伝記というよりは、むしろ、改革者の偉業と闘いとを追悼の念をこめて綴った個人的証言というべきもので、カルヴァンの遺言と著作目録と共に、八月十九日付で発行された。

しかし、より完備された伝記の必要性は当初より強く感ぜられたようで、翌一五六五年、改訂版が同じく『ヨシュア記註解書』に付して出版された。第二のフランス語改訂版は、著者名と出版日は初版のものをそのまま踏襲しているが、内容的には伝記として整備・拡大され、初版にしばしば見られた感情のほとばしりなどは客観的な表現に席を譲っている。この作品は、ベーズ自身が後に著者性を否定し、それを彼とカルヴァンとの同労者であったニコラ・コラドンに帰していることなどから、一般にはベーズの作品とは考え難い。しかし、故意か偶然かは判明しないが、この作品がベーズの名を冠していることや文体などからして、ベーズがコラドンの蒐集した資料を用いながら書き上げた、とする学者もいる。

ベーズ自身は第二版に不満足であったのであろうか、カルヴァンの書簡集の編纂・出版を機に、従来の版に手を加え、一五

七五年、『書簡集』に付して決定版カルヴァン伝を出版している。これはラテン語原本であり、文章は力強く、簡潔で、記述には歴史家としてのベーズの片鱗が伺われる。カルヴァンの死から十余年の才月の経過を物語るのであろうが、初版に較べると、決定版は改革者の業績を末代に遺すという伝記本来の目的もさることながら、記述の客観性を重んずる歴史的要素と改革者の名声を攻撃から守らんとする弁証的要素とに著者の努力の跡が見られる。決定版は、先世紀までしばしばラテン語で再版され、またフランス語、ドイツ語、英語、オランダ語、ハンガリー語などにも広く翻訳されている。英訳本で今日まで版を重ねて広く親しまれているのはヘンリー・ベヴァリッヂの一八四四年版であろう。

カルヴァン伝の邦訳は、すでに、一九五〇年、活水社より『カルヴィンの生涯』、テオドール　ベザ著、田中剛二・得永新太郎共訳として出版されている。活水社版はベヴァリッヂ訳を底本としたようで、どちらかというと、英訳本からの訳出の特徴があった。しかし、この度、神戸改革派神学校で歴史神学を講じておられる田中剛二教授の手により、「現代とキリスト教」小論叢書シリーズの一冊として、『ジャン・カルヴァンの生涯』が再登場することとなった。これは、活水社版旧訳を基礎とはしているが、かなりの改訳が施され、文体も現代風に改められ、カルヴィン→カルヴァン、ベザ→ベーズ、ジュネバ→ジュネーヴなど人名・地名の表記もフランス語読みにほとんど統一されている。田中教授の訳出は、ベーズの洗練された文章がそうであったように、明快で、無駄がなく、しかも格調高く、読書の楽しみを増してくれる。

『ジャン・カルヴァンの生涯』は、ノワイヨンでの生い立ちや青年時代のパリ、オルレアン、ブールジュにおける教育の描写から始まる。当時、十一才の秀才であったベーズが、十才年長の俊才カルヴァンに初めて出合ったのもブールジュのヴォルマール教授のもとであったので、この頃のカルヴァンの生涯の描写はベーズにとっても懐かしいものであったろう。このヴォルマールの助言により、カルヴァンはギリシャ語を学び、改革者としての形成に多大の影響を蒙ることになる。カルヴァンが禁教であったプロテスタント信仰に次第に導かれ、それゆえパリを、ついには母国フランスを去るにいたる経緯は、淡々とした文章の中にも危機感を読者に与えてくれる。

こうして、一五三六年、たまたま通りすがりのジュネーヴで、市の改革者ファレルに強引に要請されたカルヴァンは、改革者としての第一歩を踏み出すこととなった。ベーズの筆によると、カルヴァンの初期のジュネーヴ教会改革とその挫折、ストラスブルグでの経験、そして一五四一年のジュネーヴ復帰から一五六四年の死まで続く改革の苦闘は、それぞれ神が彼に与えられた大きな使命かつ試練であり、彼はそれを並外れた決意と忍耐とをもって達成した、とされる。このように、カルヴァンの教会改革の闘い、市当局との関係、外交関係、著作などを年ごとに追いつつ、ベーズの筆致は、中でもカルヴァンが一五四一年より十余年もかけて導入することができた自律教会訓練権確立の経緯に焦点を絞っている。これは、ベーズ自身も後に、ジュネーヴに隣接するヴォーのローザンヌにてその確立に失敗し、ジュネーヴに逃れたという経緯もあるため、極めて深刻な問題として取扱われているといえよう。

格別、ベーズは成熟した改革者カルヴァンの晩年の描写において、深い理解と敬慕の念をあからさまにしている。カルヴァンにとって「恒久の幸福の発端」であり、残された者にとっては「最大の……悲しみの発端」と言われた生涯の最後の年、一五六四年の描写は、天を仰いで「おお主よ、いつまで」を口ぐせにしていた老改革者の姿を、そして、「主なるわれらの神は、生来決して大胆ではなかったわたしを、(邪悪者の)企画の一つにも屈服することがないように強くしてくださいました」と述懐する神の僕の姿をあらわにし、読者の胸を打つものがある。

ベーズの『ジャン・カルヴァンの生涯』は、後代の歴史家の手になる、より客観的で、かつより歴史学的に信頼しうるカルヴァン伝やジュネーヴ教会改革の歴史などとは異なった視点を読者に与えてくれるように思われる。それは、教会を愛し、教会改革のために生命を捧げた者の視点であろう。それゆえ、このプロテスタントの古典が「現代とキリスト教」シリーズの一環として、現代の教会改革に問いかける意義はあろう。たしかに、訳者は、本書の刊行にあたり専門家でない読者の助けになるであろう解説や、また旧訳版には収められていた巻末注を加えていない。推測に過ぎないが、訳者はそれらをあえて加えず、本書の描く改革者カルヴァンの生の姿をもって現代の教会にチャレンヂしているようにも見受けられる。いずれにしろ、カルヴァンと教会改革に興味をもつ者には、是非お奨めしたい良書である。

最後に、煩瑣に陥ることを恐れるのではあるが、本書と旧訳版、ベヴァリッヂの英訳版、そして『カルヴァン全集』第二一巻所蔵のラテン語版を比較して、気付いた点を参考のためいくつか挙げておきたい。

訳出上の問題であるが、「(教会政治に関する)古代教会のすべての布告」(四五頁)は旧訳版の「従来の布告の凡て」の方が原本により忠実であろう。原本の「congregatio」はジュネーヴでカルヴァンが一五四一年頃より制度化した牧師を中心とし、信徒の参加も認められた各週ごとの聖書講義あるいはそのための会合を意味したようだが、これを「牧師会」(二〇頁——旧訳版では「集い」)とするのは誤訳とは言えないが、問題はないだろうか。この原語は、教職者会あるいは牧師会を意味すると観られる「collegium ministrorum」から原本において区別されている。また、これをフランス語を用い「コングレガシ

オン」とする訳出例もあるようである。

人名の表記上の統一が欲しいものには、ソッツィーニ（三四・四三頁）、アルシアトとブランドラーター（五〇頁）、マルティール（二八・五四頁など）がある。イタリヤ人神学者マルティールに関しては、イタリヤ語とフランス語との表記により相違があろうが、いずれにしろ、より一般的に知られているヴェルミーリをカッコででも加えると理解されやすいかもしれない。

本書が底本（あるいは底本の一つ）としたと考えられるベヴァリッヂの英訳版の問題も、間接的ではあるが、本書の訳出と関連してこよう。例えば、「長老会」（一五・三七頁）は原本では「collegium ministrorum」であり、論点が長老会の管轄であった教会訓練というよりは教職者・牧師会のそれであった教理上の問題であったという連脈からして、ベヴァリッヂの誤訳とは言えないだろうか。「帰ってくると（一五五五年）」（四七頁）は、次行の「またその翌年（一五五七年）」とした方が混乱がないであろう。また、「ローレンス・ノルマンド」（三二・六二頁）はローレンス・ド・ノルマンディ、「クラウディウス・スポンス」（七四頁）はクロード・デスパンス（Claude d'Espence）とした方が統一が取れるのではないだろうか。

（日本基督神学校教授）

T.H.L. Parker
JOHN CALVIN
J.M. DENT & SONS LTD London
1975 pp. xviii+190

金田幸男

筆者の手元にある R.H. Bainton, D. Kempf, P.D. Klerk, その他の文献目録を通覧して言えることであるが、英語圏に限り（おそらく、その他においても類似していると予想している）、カルヴァンの伝記に関する文献は、必ずしも多いとはいえないものの、宗教改革者の間では、ルターに次ぐほど散見できる。しかし、本格的と言うか、読者を満足させる程の丹念な著作となると、パンフレット類を除外すると、数え上げる位となり、独創的な視野から記述されたものとなると、ほとんどなくなってしまうのではないかと思っている。そのような状況の中で、本書は、ヅウメルグ程の大著とは言えないにしても、豊富な第一次資料（特にカルヴァンの手紙の巧みな使用が著しい）の駆使、カルヴァンとその時代の政治、社会、文化に関する博学な知識に基づいて叙述され、従来の英語で書かれたカルヴァンの伝記に関する著作の中では、一級の部類に属するのではな

いかと考えられる程のものである。更に、著者自身語っているように、最近四十年間の、教会と世界を巡っておこった大きな変化を見据えて、カルヴァンの伝記を書き直そうとする意図が見られる。この斬新な視座からの論述という点でも、注目に値する著作であろう。

さて、最近四十年間の、教会と世界が経験した大きな変化というのは、何か。著者は三つの点を挙げている。その第一は、ヒトラーの出現と前後して惹起した、ドイツ告白教会の苛酷な、しかし多くの挫折を伴ったドイツ教会闘争である。これにおいて、持続的に、強力に、ヒトラーとその宗教政策の担い手となった「ドイツキリスト者」と拮抗した告白教会の指導者達に、ルターと共に、カルヴァンを深く研究し、その感化を受けた人々が多くあったことを認めないわけにはいかない。カルヴァンの影響を語ることなしに、ドイツ教会闘争について、十分には語れないだろう。第二は、第二ヴァチカン公会議の開催である。この公会議以降、いろいろの面で、ローマカトリック教会に変化がおこった。そして、カルヴァンに対する見方にも変化が生じる。その証拠に、従来の敵意をむき出しにしたカルヴァンの叙述ではなく、冷静にカルヴァンの業績と思想を評価する、ローマカトリックの神学者、教会史家の手になる著作が登場したことである。ここで、エキュメニズムの線上で、カルヴァン研究でさえ、ローマカトリックとの対話が成立する素地が形成されているのである。第三に、カール・バルトをあげる。カール・バルトにおける、カルヴァン批判と、カルヴァンの教説に新しい光をあてた功績を無視して、カルヴァンの神学を研究することはできないと著者は述べている。こうして、著者は、古典に属する、英語で書かれたカルヴァンの伝記を正当に評価しつつ、以上の視点から、新しくカルヴァンの伝記を著す積極的理由を見出しているのである。実際、著者パーカーの指摘する通り、カルヴァンの業績とその神学的思想を研究しようと思えば避けて通ることのできない事実である。過去の人物の事業とその思索を学ぶものにとって、それは、過去の回想に終るものでなければ、単なる出来事の列挙だけでは決して済ますことはできない。当然、その人物について記された伝記は、解釈され、批判されたものであり、その上重要なことは、現代に生きるわれわれに対する切実な問いかけでなければならない。

パーカーが挙げている点は、別の見方からすれば、教会と国家との係わりの中における教会の自律性の問題ないし国家との対決における教会の告白と教会改革の主導性の問題、次に、いうまでもなく、エキュメニズムの問題（カルヴァン程、閉鎖的な改革者はいないとして誤って理解されている）、そして、教会の務めの問題（カール・バルトの影響というと、われわれは、ニーゼルの『カルヴァンの神学』にみられるような、キリスト論的強調を想起するのであるが、パーカーによれば、むしろ、バルトの、カルヴァンにおける御言葉の宣教、特に説教への傾斜を重んじているようである）の三点に、まとめることが

できるのではないかと思われる。

著者パーカーは、本書で、これらの視点から、カルヴァンの伝記を著わそうとしている。但し、本書を一読した印象では、これらの視点から切り込んでいるとみうけられるのであるが、それが全体にわたっているので、読んでいく途中で、著者の意図がわかるというような結果になっている。

全体を通じていえることは、著者の穏健な立場が至るところに反映しており、筆者にはいくつか首肯できない点（特に、聖書の霊感と権威の問題）はあるけれども、好意的なカルヴァンの伝記ということはできよう。

本書の内容。

本文に入る前に、十八ページの導入部があり、後半八ページは序論となっている。ここでは、宗教改革者カルヴァンが登場する、いわば舞台の背景について述べられているが、著者は、特に、モーのグループを重視している。モーのグループの消長が、フランスの宗教改革運動に多大の影響力を与えたのは周知の通りである。ここに、その是非を問わないとして、カルヴァンが、フランスの、フランス人の宗教改革者であったことの特質の重要な背景が、提示されているのである。カルヴァンは、宗教改革期の第二世代に属する改革者ではあるが、それが、独創性をもたない、宗教改革の担い手という意味にはならない。フランスの土壌を考慮すれば、カルヴァンもまた、先人に劣らぬ特質をもった宗教改革者なのである。

第一章　少年及び青年時代　(1)教会の子、(2)教養科目の学生、(3)哲学の訓練。

ノワイヨンでの誕生から、パリ遊学まで。特に、モンテーギュ校での苛酷な教育方法と内容が、詳しく述べられている。著者は、この間、受けた哲学教育のカルヴァンに対する影響を重視している。

第二章　オルレアンとブルージュ　(1)市民法の研究、(2)友人と親戚、(3)ブルージュと新しい出発、(4)最初の本、(5)不公平からの脱出。

ここでは、ヒューマニスト（人文主義者）としてのカルヴァンが扱われる。この時期、学んだ法学研究は、カルヴァンの使用する語彙、彼の扱う倫理に影響を与えたこと、カルヴァンの回心の事情と友人関係、等が主要な内容である。

第三章　キリスト教綱要　(1)その性格と目的、(2)律法・信仰・祈り、(3)礼典、(4)自由（キリスト者の自由）。

一五三六年の『キリスト教綱要』初版について、まとまった紹介となっている。一五五九年の最終版についての知識は、いくばくかはあるが、初版についてはあまり知られていない。この章は、簡潔な要約ともなっている。

第四章　ジュネーブでの試練　(1)故郷からの亡命、(2)十六世紀のジュネーブ、(3)教会の権威、(4)理論及び実践における組織化。

コップ事件に発するパリ脱出、逃亡生活から、ジュネーブでの最初の働きについて。

一五三七年の教会規則が、中心的に扱われる。宗教改革は、教会の改革であり、ひいては礼拝の改革であった。そのために、原理においても、実践においても、強力な、首尾一貫した組織化が必要である。同僚ファレルとの試みは、束縛を嫌うジュネーブ市民によって挫折させられる。

第五章　ストラスブルグにおけるフランス人教会の牧師　(1)家庭と教会の問題、(2)新しいキリスト教綱要、(3)ローマ書注解、(4)ジュネーブの回心。

ジュネーブを追放されたカルヴァンの、ストラスブルグ滞在の時期。カルヴァンの個人生活でも、その神学的思索においても、ストラスブルグ時代は、有意義であった。ブッツァーとの交誼、カルヴァンは、教会の自律性の問題についてをはじめ、ブッツァーに多くのことを学んだ。結婚。そして、この時期に「キリスト教綱要」の第二版と、ローマ書の注解書を刊行する。前者は、これから数度改訂される『キリスト教綱要』の基本線を確定するものであり、後者は「聖書注解の王者」の出発となる書である。カルヴァンは、終生、この綱要の改訂と聖書各巻の注解の著作をつづけるが、この時に、その基礎理念が確立されるのである。

第六章　ジュネーブ教会の安定化　(1)教会規定、(2)礼拝における教会、(3)説教者カルヴァン。

ジュネーブからの懇請を受け、カルヴァンはジュネーブに復帰する。彼は中断したことを、精力的に再開する。そのために、説教に全力を投入する。改革派教会が、みことばによって立ちもし倒れもする教会であれば、みことばを語る職務（ミニストリー）は、重要視されなければならない。

第七章　神の教会に対する反対　(1)反対者の群れ、(2)家庭の人カルヴァン、(3)「キリスト教綱要」と新しい新約聖書注解、(4)反対者は増大する、(5)訓練に対する争い。

カルヴァンの努力にもかかわらず、教会の訓練を喜ばない反対者達は、増大していった。市の政治権力を掌握した彼らとカルヴァンとの激しい戦いを背景に、カルヴァンの不屈の精神とその営みが描写される。

第八章　挫折より安全へ　(1)セルベトの試みとその死、(2)ペラン派の失墜、(3)ジュネーブ大学、(4)旧約聖書注解と『キリスト教綱要』最終版。

ジュネーブでの晩年の時期。反対者達との闘争は、カルヴァンを窮地におとし入れたが、その最たるものが、セルベトの登場であった。セルベトをかついだ反対者達は、セルベトの処刑と共に足許からくずされ、カルヴァンはついに、ジュネーブで勝利を得た。この晩年のカルヴァンの努力は、更に、ジュネーブアカデミーの創設に向けられ、ベーズ等の協力を得て開校し、ここから宗教改革の精神に燃えた伝道者らがフランスをはじめ、各地に散っていった。

第九章　諸教会への配慮　(1)一つの体、(2)公私にわたる手紙、(3)ジュネーブの外へ。

カルヴァンは、ジュネーブという小さな都市のことだけ念頭においていたのではない。フランスをはじめ、イングランド、スコットランドの、福音主義者の君侯や教職達と文通し、情報を交換し助言を与えている。それは、まことの教会が一つの体であるという信念に基づいているのである。

第十章　死に際し、キリストが獲得される。カルヴァンの告別と死。

本書の中央に、写真が数葉はさみこまれている。余計なことだが、装丁のカヴァーがジュネーブ図書館蔵のカルヴァンの肖像である。

（改革派宝塚教会牧師、神戸改革派神学校講師）

M・ワイルズ教授の著作をめぐって

岩本助成

一

モーリス・ワイルズ（Maurice Wiles）教授は、現在、オックスフォード大学欽定神学教授及びクライスト・チャーチのキャノンという要職にある。英国神学界、殊に古代教会教理史や教父学の領域において、Henry Chadwick, G.W.H. Lampe といった碩学らと共に、指導的役割を果している事は周知の通りである。教授は又、英国教会（英国聖公会）の教理委員会の議長を務めており、教会での発言力も極めて強い。筆者がこのような代表的な学者の一連の著作を紹介する事によって、英国における教会史・教理史研究の一端をかいま見る事ができ、更に現代神学の状況を読者と共に批判し検討する事ができるならば、望外の喜びである。

二

ワイルズは初めから、新約聖書と「古カトリック教会」又は、「初期カトリシズム」と呼ばれている（普通、原始キリスト教に続く、おおよそ五、六世紀頃までの古代教会を指す）古代教会との歴史的関係に注目しており、次の二著を世に問うてその炯眼ぶりを示した。

The Spiritual Gospel: The Interpretation of the Fourth Gospel in the Early Church, pp. x+182. London: Cambridge Unv. Press, 1960.

The Divine Apostle: The Interpretation of St. Paul's Epistles in the Early Church, pp. vi+162. London: Cambridge Univ. Press, 1967.

両書とも、古代教会における聖書解釈史の研究であり、ケンブリッジ大学クレア学寮の講師及び学監時代の著作である。前者では、ヨハネ福音書の古代教会における註解書と註解者に触れた後、著者と目的、共観福音書との関係、象徴やしるしの問題、主要概念の検討、グノーシス派との関係、第三、四世紀のキリスト論解釈との関係、テオドロスとキュリロスにおける釈義の実例、救いの福音書としての特質などが論じられている。後者は、同様な研究方法が使徒パウロに適用され、古代教会におけるパウロ書簡の註解者たち、パウロの人間論、律法論、キリスト論、恵みと信仰、信仰と業の諸点を論じている。

筆者は前述の如く、ワイルズが新約聖書を現代に直結するのでなく、先ず、「古カトリック教会」という時代におけるその受容と解釈の研究へと赴いている事を高く評価したい。「古カトリック教会」の時代がいかに重要な時代であるかは熟知されている事であろう。聖書正典、信条、教職制のみならず今日までのキリスト教会が負う諸伝統が明確な形を形造ったのは、正にこの時代であった。しかし教会には、この時代の豊かな富に対する再発見と再検討の業が少ないばかりでなく、学問的批判作業とは呼び得ぬ概念操作を通しての、この時代への軽視が横行しているのである。その後のワイルズの思想に、よしんばいかなる変化があったとしても、彼の示すこの時代の重要性への理解と、伝統の意義の強調には、何らの変化も認め得ないのである。

三

年代が前後するので読者の混乱を恐れはするが、次項で筆者が特に紹介したいと願う三著作を除く他の著作活動をここにまとめて紹介して置きたい。

The Christian Fathers, pp. 190. London: Hodder & Stoughton, 1966.（本書は、Knowing Christianity というシリーズの一冊で、今日、英語圏の教父神学思想概説書としては最適のものであろう。神観、キリスト論、受肉論、罪と救い、礼典論、教会論、倫理の各項から成る）。

Documents in Early Christian Thought, pp. x+263. London: Cambridge Univ. Press, 1975.（本書は、Mark Santer（ケンブリッジ大学、ウエストコット学寮長）と共に編集した、古代教父の神学思想資料集である。神、三位一体、キリスト、聖霊、罪と恵み、伝承と聖書、教会、礼典、キリスト者生活、教会と社会、終末の各項があり、それぞれに代表的教父の諸著作からの文章が編集されている。教父の莫大な資料からこのような資料集を編集する事は至難の業である。選択に関する批判もあるが、学界は、一般読者が直接、教父の文章に接しつつ古代教会神学思想を学び得る事を評価し歓迎しているようである）。

What is Theology? pp. viii+117. London: Oxford Univ. Press, 1976.（広い視野と斬新な見方を盛り込んだ神学諸科解題

である。英国でもこのような解題が神学研究を志す者たちの間で求められているのであろう。ワイルズは他の神学諸科解題、たとえば、F.G. Healey (ed.), *Preface to Christian Studies*, pp. 354. London: Lutterworth Press, 1971. に、旧約学の P.R. Ackroyd, 新約学の C.F.D. Moule, F.F. Bruce, 教会史の E. Gordon Rupp, T.H.L. Parker らと共に執筆し、「教理研究」の部門を担当している)。

この他に、前述の英国聖公会、教理委員会の研究レポートが相次いで出版されているが、特に、聖餐論に関しては、*Thinking about the Eucharist*, pp. vi+122. London: SCM Press, 1972. 更に、聖書及び信条におけるキリスト教信仰に関しては、*Christian Believing*, pp. xii+156. London: SPCK, 1976. が注目されよう。ワイルズはこれらの研究の責任者でもあり執筆者の一人でもある。

四

ここで、筆者が特に紹介したいワイルズの三著作を先ず列記して置く。

The Making of Christian Doctrine: A Study in the principles of early doctrinal development, pp. 184. London: Cambridge Univ. Press, 1967. (以下、*Making* と略記)

The Remaking of Christian Doctrine, pp. 150. London: SCM Press, 1974. (以下、*Remaking* と略記)

Working Papers in Doctrine, pp. 213. London: SCM Press, 1976. (以下、*Working Papers* と略記)

Making 執筆の目的は二つあると著者は述べる。第一の目的は歴史的なもので、古代教会がかなり組織的な形でその信仰を形成するに至った道筋を考察する事に向けられている。第二の目的は方法論的なものである。即ち、後代へと継続的になされて行った教理展開へと光を投射させる方法で、この古代教会の歴史的形成の過程を検討して見ようという試みである。以上、二つの目的から古代教会における教理展開の諸原則を問うのである。

さて、キリスト教会は絶えずその信仰と宣教の根拠を明確にすべしとの挑戦を、内からも外からも受けてきた。ユダヤ人やギリシャ人からの挑戦、更には異端による挑戦があった。特に複雑多岐に亘る異端勢力との対決の厳しさは、教父の多くが書き残した反駁論に示されている。かかる状況下で、教会は自らの認識、つまり教会の使信と信仰との深い理解へと導かれて行ったのである。古代教会における教理形成の源泉は、三点に絞って考察されている。

第一の源泉は、申すまでもなく聖書である。ワイルズは、すべての教父が聖書の霊感と権威とを自明の事としているのを確認する。同時に、当時の緊迫した状況は、彼らをしてただ単にこの根本的真理を反復するに止まる事を許さなかった。矛盾して解され易い章句の調和の問題、更には、アタナシオスとアリ

ウスが、カッパドキア教父とエウノミオスが共に聖書に訴えるという問題をどうしたらよいのか。しかもこの深刻な現実からだけ、御言の研鑽の重要性及び、聖書が広義の伝統といかに深く関連しているかを学び得たのでもあった。ワイルズが第二、第三の源泉として挙げる、教会の礼拝及び救いの現在的経験は、聖書とともにこの広義の伝統に含まれている。彼の貢献の一つは、古代教会の教理形成を、教会論及び礼拝論の光のもとで理解しようとした点にあると言えよう。又、キリストの生命は、聖霊によって信じる者の今日の現実となり、救いとなるという事実をも教理展開の一源泉と見ている。

Making の巻末近く、ワイルズ教授はかく主張する。今日の我々にとっては、教理形成期の古代教会を無視する事も偶像視する事も許されていない。ただ教理展開というユニークで複雑な過程にあって、古代教会の先達が、聖書、礼拝、救いの経験をいかに深くその源泉としていたかを学ぶ事に忠実であらねばならない。全体としての教会がこの点を強く自覚する時にのみ、真の形成は可能となると言うのである。誠に粗雑な紹介で本書を傷つける事を恐れるが、*Making* の要旨の一端は以上の如くであろう。

次に、*Making* に至るまでの諸論文と、*Remaking* 執筆に至るまでの時期の諸論文を集成したのが *Working Papers* である。前者(一九五七年〜一九六七年の諸論文)は、三一論の起源、教父時代のキリスト論、洗礼論などを含む。一論文をはさんで後者(一九六八年〜一九七三年の諸論文)六篇が編集されているが、いずれも各研究領域の学者間に討論を惹き起こす多くの論点を持っている。ワイルズが本書を世に問う理由の一つは、恐らく次に紹介する *Remaking* に対する多くの批判に接し、いかなる批判的作業を経ながら同書の論点に達して行ったかを明らかにしたかったからであろう。

Remaking は *Making* の続編でもあって、*Making* で試みた古代教会教理形成論を、現代における教理形成の業へと適用しようと試みた訳である。ワイルズは本書を唯一の現代神学解釈とも改革のプランとも考えておらず、ほんのスケッチに過ぎないものと語る。だが聴衆を前にしたケンブリッジ神学会での Hulsean Lectures であるだけに、流暢でかなり鋭く、また大胆に現代神学の問題点を列挙している。神について、キリストの人格について、キリストの御業について、恵みと聖霊について論じられ、更に同講義になかった「体の復活について」なる一篇が加えられている。

本書の読者は、この労作の一読後、「伝統の批判的継承」という表現を思い浮べるかも知れない。ワイルズ教授は、*Making* において展開した古代教会の教理への理解と共感とを、本書においても決して捨て去ったり軽視している訳ではない。しかし教授が、受肉論や贖罪の客観的見方などは現代における教理形成の業に適用し難いと断じる時、又、人間の苦悩を思いやる神を素描し始める時、それは前著で彼自らが指し示した教理形成

の源泉からは遠く離れた、伝統の批判的継承ではあるまいかと疑わざるを得ない。彼はいわゆる伝統なるものへの「刈り込み」を試みた。事実、刈り込みなき継承はないであろう。だが問題は、刈り込みの規準であり、内容であり、その結果である。我々は著者が列挙する複雑な論点に、現代神学の袋小路的危機を意識させられこそすれ、彼自ら指し示した教理の諸源泉との、積極的で創造的な関係を現代の教理形成に見せられることとはないのである。それが果して伝統の批判的継承なのであろうか。

五

紙幅もつきてくるので、以下に、現代の指導的なこの碩学への筆者の抱く質問と提言とを敢えて述べ、この紹介の責めを果たしたい。

第一点は、筆者が現在、学生と共に講読しているDietrich Ritschlの *Memory and Hope*[1]の神学的洞察に深く負う点である。Ritschlの主張するところの一端は以下の如くである。現代神学界は一方において、現代世界の危機感を背景に今日におけるキリスト教の存在理由を鋭く問い直している。他方、現代の歴史批評学的再構成を経て登場するさまざまな「イエス像」がそれらへの答えと関連している。いわゆる「歴史のイエス」と「今、ここで」のキリスト教使信との直結である。リッチュル教授（マインツ大学）の炯眼は、ここに一つの重大な欠落を見出している。その欠落とは、教会に現臨し続けたもう復活のキリスト（Christus praesens）なのである。現臨のキリストと彼の教会を欠落させたまま現代と過去の一点とを直結させているところに、現代キリスト教が無神論キリスト教と化すものをうみ出したり、「何故、イエスでなければならないか」を自問自答せねばならぬ所へまで立ち到っている理由があると力説されている。出発点の新しい確認から始めて、リッチュルは西方教会の伝統がアウグスティーヌス主義に立った点、ギリシャ教父の神学思想の受容に問題のあった点などを挙げて行く。

ワイルズ教授が *Making* の巻末で「全体教会」に触れた時、筆者は *Remaking* の視点は正にここに据えられ、正にここから展開するものと期待した。残念ながら、今の所、この期待は応えられていない。教授がもう一度、*Making* に立ち戻って古代教会の教理的諸源泉を、全体教会から徹底的に探査され、現臨のキリストと教会との関係を基盤にして深く考察される事を望むのである。教授自身、その見解の近似性を認めるJ・ペリカン教授の優れた一連の研究も世に問われつつある時でもある。[2]

第二点は、聖霊と教理の継続性との関係についてである。教授は教理の絶対的権威化と歴史的相対主義とを、正しい観点から、ともに厳しく斥けている。だが現代神学の多様性をのみ力説されると、読者は、「教理史の継続性は、教会の継続性と、その支えである聖霊への信仰を基盤としている」[3]事を忘れてしまい、果てしなき相対化の道を辿ってしまわないだろうか。

その他、古典キリスト論の受容の問題など個々の問題についての疑問は尽きない。勿論、これらはワイルズ教授に向けられる提言や質問でありつつ、同時に、筆者自身を含む今日の教会に向けられているのである。「正統主義は人をそのあるべき場に抑えはしたが、しかし人間の合理性を高揚し、聖書の真の主題であり、中心であるイエス・キリストを見失い、また聖霊の照明とそのみわざを純正に評価することがあまりにも少なかった」[4]とのブロミリー教授の警告を味読したい。

注

① D. Ritschl, *Memory and Hope*, pp. xviii+237. New York: Macmillan & Co., 1967.

② Jaroslav Pelikan, *Development of Christian Doctrine*, (Yale Univ. Press, 1969) や *Historical Theology: Continuity & Change in Christian Doctrine*, (Hutchinson & Co., 1971) 及び *The Christian Tradition: A History of the Development of Doctrine*, Chicago: Univ. of Chicago Press, vol. 1 (1971), vol. 2 (1974)—全五巻の予定など。

③ B. Lohse, *Epochen der Dogmengeschichte*, (1969²) s. 23.

④ テニー、ヘンリー編、舟喜訳編『聖書論論集』（聖書図書刊行会）二九六頁。

（大阪基督教短期大学助教授、図書館長）

ロイス・E・ルバー著　多井一雄訳『キリスト教の教育』

一九七一年　いのちのことば社

高橋久之

今日福音主義の立場を取る諸教会が、「伝道」の強調から、「教育」の重要性を認識し始めた。これは日本の教会の成長期の当然の結果であるといえる。今一つ世界の教会が直面している問題は世俗主義との闘いである。

R・ヘンダーライトが、一九五九年度のジョージ・マックナット・レクチャーの序文に「今日のキリスト教教育ないしは教会教育として通用している大部分の行為が、イエス・キリストの福音に根ざすというよりは、むしろアメリカの世俗の哲学によって毒され、その結果、教会教育が不当な前提のもとに歪曲されるという悲しむべき事態がひき起こされているように思われる」(Forgiveness and Hope—邦訳「教会教育の神学」) と、シェルトン・スミス、J・D・スマート、D・C・ワイコフ、I・V・カリーといった学者の批判を歓迎している。この講演から五年前、一九五四年にオランダの自由大学副学長であった

ヤン・ワータリンクも、米国でキリスト教主義教育の根本問題についての講演の中で、「プラグマティズムの教理は、教育を心理学や社会学から得た知識を操作する単なる技術―応用心理学―としてしまう」と述べている(Basic Concepts in Christian Pedagogy―邦訳「キリスト教と教育」)。

こうした批判の中から、教育学がはたして一個の科学とみなされうるのか。教育の理論と実践はどのような仕方で諸原理の影響をうけるのか。キリスト教主義教育学の基本的諸原理とは何か、といった諸問題の解決に迫られた。教育学という科学の確立される過程で、当然扱わなければならない諸要因がある。

(1) 教育を受けなければならない生徒
(2) 教育を与えられた使命として、これに携わる教育者
(3) 教育において志向される目的像
(4) 使用されなければならない方法

これら四点は、いずれも他のどの科学にも属さない教育学の取り扱うべき分野である。

一九五八年、ホイートン大学の大学院の自分のクラスのために、ロイス・E・ルバーは本書『キリスト教の教育』(Education that is Christian)を執筆した。ルバーは、五年の公立学校教師経験を経て、ルーズベルト大学で心理学の学士号を、ホイートン大学でキリスト教教育の修士号を、ニューヨーク大学で宗教教育学の博士号を得て、一九四九年よりホイートン大学で教えられ、今は大学院キリスト教教育学科主任教授をされている。最近、相次いで二冊の著書が邦訳された。これはルバーの考えを知るのに貴重なものといえる。因みに二書とは、『教会の教育計画と実践』(Focus on People in Church Education)と、『教会学校の子供たち』(Children in the Bible School)である。

本題の「キリスト教の教育」という時に、神学校、音楽学校また一般の大学教育の分野は取り扱わない。ルバーは、こうした問題を論ずることなく、いきなり焦点を教会学校教育に合わせている。こうした点で一般の分野からの移行の問題点が論じられたらよかったと思う。

本書は、全体を九つの章に分けている。

一　キリスト教教育に必要な基礎
二　代表的な教育の類型
三　神のもとから来られた教師
四　聖書のほかの個所からの洞察
五　教育における聖書の使用法
六　教授・学習過程
七　権威と創造性
八　カリキュラムの構成
九　教師である神とともに働く人間の教師

一、二章において、世俗的な世界からの教育体系を借用する

のをやめて、神の啓示から私たち自身の哲学、神ご自身の固有の活動方法を引き出すべきだとして、在来の教育体系を概観している。その中で、学習者の内的要因と外的要因の強調を対比させての類型化を試みている。

低年齢者にとって、生れながらに備えている可能性(先天的素質)は、年齢と共に内から自然に成長し発育して来る。こうした時期には内的要因が教育を支配している。でも学齢期に入ると、成熟者たる両親や教師が外から方向を指示したり、ある方面の可能性を助け伸ばしたり、時にはある方面の可能性を抑止したりすることができる。教育者の立場からすると、生徒の持つ内的要因を考えなくても、教師が自分の思いのままに事柄を正確に決定できるという点で外的要因は極めて扱いやすい。

このことは、教育史の中にも見られる。ルバーはこうした流れの中の代表的例として、近代教育の祖ともいうべきヘルバルト学派を挙げて批判している。彼とその弟子W・ラインたちによって規定された四乃至五段階は、外的要因の過度の強調から、主知主義、形式主義という非難を浴びて来たことは周知のとおりである。

これに対して、教師が生徒の身体的発達や能力、欲求、興味、傾向を研究して、生徒の向上の手引きにしようと努めた内的要因の強調者として、アテネにおける初期のギリシャ教育、ジャン・ジャック・ルソー、ペスタロッチ、フリードリヒ・フレーベル、それに加えてジョン・デューイを挙げて簡単に論評している。でも、デューイに見られるように、制度化された宗教を文明最大の敵と見なす余りに、人間の思考から神をまっ殺すべきだとするとき、過度の内的要因の強調の危険性を指摘している。

こうして、ルバーは、ヨハン・アモス・コメニウス(一五九二―一六七〇年)を登場させる。教師が教えることを少なくして、学習者がもっと多くのことを学び、現在から将来に向っての教育をすべきだ。そのためには、内的要因と外的要因の調和が大切だと説いた。「発達は内側から生じる。成熟へと向って発達する内部の力によって成長を促されないようなものに、自然が発達を強制するようなことはない」(48頁)として、純粋な内的変革は生徒のどのような形の進歩にとっても重要である、全人格教育こそ、教育の本質であるとし、個人差を認めることを強調した。このコメニウスの指向している教育理論をルバーは再評価しようとしている。

三、四章において、イエス・キリストの教育方法や、旧約、新約聖書の中から教育の原則を引き出そうとし、本書の四分の一以上の紙面を割いている。ここに教えられる教育者としての学習者に対する柔軟な姿勢、態度は在来の教育の類型とちがうし、教えられることが多い。ただ三章冒頭に引用されているトウザーの四つの行動方針は、聖書の良さを強調しても、聖書の権威性の強調にはならないのではないか。本書の目的がそれでないにしても、強調の相対性が気になる。

五章において「教育の原理」にふれている。「日曜学校での聖書の野球ゲーム」と教育の実態批判がなされ、学習者の受容という問題を論じ、A・マーレーのことばを引用している。「信仰とは神のことばを聞いて神を受け入れること」であると(154頁)。でも、一寸気になるのは、イザヤ書五五章を用いての説明である。その意図されるものがよいだけに残念に思う。

六章は教育の実践について、その学習指導の過程について説明がされている。普通、動機付け、導入の必要性は、教育教課の立案計画、そしてその展開、実行、評価と進んで行くが、これを、内的過程、活動過程、継続的な過程、訓練過程の四過程の学習としてまとめている。学習指導の効果性を挙げるために、個人の成長の重視と、成長の個人差を強調しているのはコメニウスの考えの引用であるといえる。

七章で、教育における中心的課題である権威とその権威のもとにある生産的生活についてしるしている。ルバーは、教会学校教育ということについて書いているのであるが、たとえそうであっても、その教師の中に「両親」を入れることは必要ではなかろうか。キリスト教の教育の場が、教会であるならそれを含んでいるのが当然とするのだろうか。家庭との結びつきにふれて欲しかった。

八章はカリキュラムである。その根底に世界観があり、カリキュラムはその世界観から生じる教育観が支えとなって生み出される。変化する世俗の教育において研究が十分すぎる程になされているのに、確固たる有神的世界観に立つ福音主義者たちのカリキュラムの貧弱なことよ、と猛反省を促している。

聖書の内容をもっと深くカリキュラムに取り入れるために、教科カリキュラム(Subject curriculum)より広領域カリキュラム(Broad-fields curriculum)的なものが採用されるべきであるとする。そうした意味での「作業単元の開発」をすすめている。これはルバーの姉妹著作二書の方に見出される。

最後の章は、宗教教育の原理にふれている。教育の意義は根源的には宗教的であり、真の教師は聖霊なる神である。教育の相互作用の真中に立ち給うのも聖霊なる神である。また学習者に無限の宝を付与するのも聖霊なる神である。故に教育者の信仰経験の確固不抜性こそ、求むべきものである。

本学会誌に書評された本の数が六十点近くあるが、キリスト教教育学関係のものはこれが始めてであると思う。先輩の多き中に拙劣なる書評、敢えて先鞭をつけし無礼お許しを乞う。

(京都福音自由教会牧師)

日本近代キリスト教史資料1

『神社問題とキリスト教』戸村政博編

一九七六年　新教出版社

西川重則

一

神社問題とキリスト教。このテーマを日本近代史に即して学ぶことが緊急の課題となっていることは、七〇年代の精神的自由の諸状況を正直に受けとめることができる人ならば何の異存もないと思われる。なぜなら、六〇年代から七〇年代にかけての日本の精神史は、神社問題とキリスト教との緊張関係において色濃く彩られているからである。

しかし、このことは何も六〇年代あるいは七〇年代に限ったことではない。神社が自律宗教であることを自ら放棄し、国家神道であることに甘んじた明治中葉以来、その対局に置かれたキリスト教は時代により多少の相違はあったにせよ、絶えず異端・邪教視の運命に直面せざるを得なかった。そして不幸なことにキリスト教自身もごく少数の例外を除いて、自らの忠誠を国家に表明すべく、妥協・変節・頽落の道を選びとることをよしとした。今を去る三十数年前のキリスト教の生きざまを本書の資料に基づいて再現すれば左の通りである。

1　紀元二千六百年奉祝全国基督教信徒大会教会合同期成の宣言発表

神武天皇国ヲ肇メ給ヒシヨリ玆ニ二千六百年皇統連綿トシテ弥々光輝ヲ宇内ニ放ツ此ノ栄アル歴史ヲ懐ウテ吾等転タ感激ニ堪ヘサルモノアリ……今ヤ此ノ世界ノ変局ニ処シ国家ハ体制ヲ新ニシ大東亜新秩序ノ建設ニ邁進シツツアリ吾等基督信徒モ亦之ニ応シ教会教派ノ別ヲ棄テ合同一致以テ国民精神指導ノ大業ニ参加シ進ンテ大政ヲ翼賛シ奉リ尽忠報国ノ誠ヲ致サントス……

右宣言ス　昭和十五年十月十七日

皇紀二千六百年奉祝全国基督教信徒大会

2　新教団創立感謝大会に於ける富田統理の第一声――教会の使命は伝道報国

「日本基督教団」が新しく創立を見た記念すべき日、〔昭和十六年〕六月二十五日午後七時から、東京神田一橋共立講堂に於て創立感謝大会が開催せられた。……大会は創立大会にて満場一致を以て選挙せられたる阿部総会議長の司会の下に開始され、額賀鹿之助氏の指揮に従ひ国家斉唱(ママ)、宮城遙拝、感謝黙禱の国民儀礼を厳粛に執行……

7　富田統理の伊勢参宮

教団認可ありて後、一度伊勢参宮をせねばならぬとの話が

あったのであるが、歳末年始にその時を見出し得ないで、心中頗る平らかでなかったのであるが、愈々〔昭和十七年〕一月十日之を断行することゝなった。

富田統理は十日夜行にて出発し、鈴木総務局長を帯同して十一日朝、伊勢大廟に参拝せられた。而して我が国に於ける新教団の発足を報告し、その今後に於ける発展を希願せられた。

参拝後、直ちに大阪に向はれ大阪支教区の信徒大会に列席せられた。

8　戦捷祝賀行事の件

文部省より左記の事項につき通達ありたり。全国にある第一部所属教会に万遺憾なきよう御配慮ありたし。

第一部総主事　村岸清彦

戦捷祝賀指導要領

㈠　全国ノ神社ハ戦捷祈願祭、大東亜所在米英勢力撃滅奉告祭等ヲ執行スルコト

㈡　国民ハ神社ニ参拝シ天祐神助ヲ感謝シ、終極ノ勝利ヲ得ルマデハ断シテ屈セサル決意ヲ神明ニ誓フコト

9　日本基督教団戦時布教指針

綱領

㈠　日本基督教ノ確立ヲ図リ本教団ノ使命達成ニ努ムベシ

実践要目

㈠　敬神崇祖ノ国風ヲ重ンジ報本反始ノ誠ヲ竭スベキコト

㈣　宣戦ノ大詔ヲ奉戴シ進ンデ国策ノ遂行ニ協力スルト共ニ思想国防ノ完璧ヲ期スルコト

㈥　日本教学ノ研鑽ニ努メ日本基督教ノ樹立ニ邁進スルコト

二

さて、右は本書（A5判・四五八頁）の中のほんの数頁に過ぎない箇所からの抜粋であるが、日本のキリスト教が骨の髄まで日本キリスト教に変節・頽落した様を如実に示している。しかも右に続いて、資料はサタンの支配に屈した日本のキリスト教を容赦なくあらわにするのである。

「10　国民儀礼の作法」「13　聖旨奉戴基督教大会実施要綱旨趣」「15　靖国の英霊」「17　日本基督教団決戦態勢宣言」「18　殉国即殉教」「19　すきを剣に」等々はその典型と思われるが、ここにそれらの文面をそのまま再現することは紙数の制約から不可能だが、10、13などによって明らかなように、キリスト教の集会においても先ず最初になされたのが、宮城遙拝、国歌斉唱、勅語（詔書）奉読、祈念であり、たとえば、祈念に際し、司会者は、「靖国の神霊に対し奉り感謝の誠を捧げ、併せて皇軍将兵の武運長久を祈念致します」という言葉をもって始め、13によれば、よりくわしく、祈念に続いて、聖書朗読、祈禱がなされ、讃美歌も戦時中にふさわしい内容が期待され、讃美歌（三七八）又は新日曜学校さんびか『桜咲く日の本』とあり、続いて、宣誓、頌栄、祝禱、敬礼と記されている。戦争の最中

とはいえ、そこには十誡の第一、第二戒に準拠した歴史的キリスト教の固有の儀式は見られない。日本的キリスト教に災された当時のキリスト教と言うには余りにもその傷は深い。その要因はいったい何か。

私はその要因を本書の二二頁から二三頁にかけて資料として掲載されている、加藤玄智『神社対宗教問題より見たる神道の一考察』（抄）に見出したいと思う。加藤玄智によれば、神道は宗派的神道と国家的神道に大別され、国家的神道は神社神道と国体神道に細別される。そして加藤氏が国家的神道を「倫理的変装」Ethical Camouflage と別称することによって、国家神道の一大特色を見事に表現したことは特筆に値する。しかもその分析が今日に至るも、なおその鋭さを失っていないことに驚嘆せざるを得ない。つまり戦前・戦中のキリスト教がこの「倫理的変装」の実相を洞察できなかったことが右に列挙したキリスト教の変節・頽落の一大要因となったと言っても過言でないほど、その影響は大きくかつ広かった。ちなみに加藤氏の文章を再現すれば左の通りである。

国家的神道の倫理的変装とは国家的神道が一見して、外観如何にも国家の儀式、典礼、国民道徳のみの如く現はれ、其本質上宗教であっても、表面は決して宗教の様に思はれぬものを指すのである。海岸の砲台を観るに、その内容実質に至っては大砲の仕懸けがあるけれども、外部から看れば唯樹木土石等から成る普通の山角水崖のやうに見える、之を砲台の変装又は佯装即ちCamouflage と名づける。之と同じ様に国家的神道の本質内容は……日本の国民的宗教であるが、外観如何にも、国民道徳若くは之と結び付いた国家の儀式典礼の様に見える。私は之を呼んで国家的神道の倫理的変装と名づけるのである。

ともあれ本書のほとんどの資料は、この倫理的変装、編者の言葉を使えば、「習合の神学」としての「神道神学」に呑み込まれたキリスト教の敗北の歴史的記録から成っている。先に記した日本キリスト教化した事例が戦時中の特別な状況下に起こったことは当然だが、問題はそのような異常な出来事と思われる事柄もそれ以前のキリスト教のあり方と無関係ではないということ、すなわち、時代の状況によっていかようにも変装する神社神道の態様に気づくことのなかったキリスト教の無防備ぶりの必然的結果であることをここで指摘しておく必要があろう。編者は、この歴史的事実を実証するために膨大な資料を収集し、それらによって「神社問題とキリスト教」の相剋を跡づけつつ、結局はキリスト教が神社神道の倫理的変装の前に一敗地に塗れる現実を資料という鏡を通して活写している。そしてそれは見事に成功している。このような試みはこの種の試論ではおそらく始めてではないかと思われる。典型的事例の一つを左に挙げる。

昭和四年三月十二日に、読売講堂で宗教法案反対基督教信徒大会が開催され、その時、「宗教への侮辱」と題し、富田満氏

が熱弁を振い、同時に、その集会において、「宗教の神聖を冒瀆し、教会の自治を破壊する」理由のゆえに宗教団体法案に反対の「決議」が満場の拍手で可決した事実と、昭和十三年の時点で、同じ富田氏が韓国の基督者に向かって、神社神道を「国家の祭祀」として神社参拝を強要した事実とがなぜ富田氏、否、当時の日本の基督教指導者にとって矛盾しなかったかの説明も、この編纂によって自然に納得がいくはずである。

かつてわれわれの先輩は、対宗教法案闘争において、神社非宗教をめぐってある種の阻止勢力を形成しえたが、国家神道が変装して神社非宗教化の作戦に転じたとき、かれらはそれにたいする有効な理論構築も、闘争方法をも、持ち合わせていなかった。反対運動は、神社非宗教化の本質を見抜くことができないで挫折した。(三一頁)

これは編者による富田氏らの事例を批判的に検討された結論であるが、この優れた洞察は今後の対神社問題においてこそ最も真剣に検討され、生かされねばならない指摘であり、予見である。本書が単なる歴史的資料として用いられるだけでは編者の意図を十分に理解したことにならないゆえんである。本書はまさに今後の変装した神社神道の神学、そしてその頂点に立つ靖国問題のためにこそ備えられ、熟読されるべき希有の指針と言うべきであろう。

なお主題別に述ぶべきであるが不可能なので、終りに本書の大きなタイトルだけを記して読者の参考に供したい。Ⅰ神社非宗教論、Ⅱ明治以降宗教関係法令、Ⅲ宗教法案をめぐる議会議事速記録、Ⅳ宗教法案とキリスト教会、Ⅴ宗教団体法案とキリスト教会、Ⅵ信教自由の闘い、Ⅶ宗教法案

(改革派東京教会長老)

〔文献紹介〕

聖書翻訳に関する日本語文献

本間正巳

最近〝日本語〟に関する関心が高まり、それに関連して、〝翻訳〟に関する書物も多く我々の目に触れるようになった。今まで、翻訳とは、語学教師、翻訳家と呼ばれる人たちの名人芸くらいにしか考えられていなかった。しかし、今日、翻訳は一つの科学(サイエンス)としてとらえられるようになり、その関連分野も広く、多くの書物、論文が発表されている。ここでは、主に今日論議の的になっている〝翻訳論〟を中心に、そして日本語の文献のみに限ってリストしてみた。文献表としては、左近淑「聖書翻訳に関する邦語文献」(日本聖書協会発行『聖書翻訳研究』一九七三年十月。七号。四〇頁—四七頁)、中沢洽樹「翻訳論文献紹介」(『同上誌』一九七三年五月。六号。四一頁—四五頁)があるので、それと重複するものもあるが、その後出版されたもの、又、とくに日本語に関連して最近筆者が読んで、聖書翻訳および翻訳聖書を読むのに資すると思われるものも加えた。

翻訳・言語学関係の雑誌およびその略記号を記しておく。

「みことば」=新改訳聖書刊行会『聖書翻訳季刊誌〝みことば〟』
「ニュース」=日本聖書刊行会『新改訳聖書ニュース』
「みことばの友」=日本聖書刊行会『みことばの友』
「聖書信仰」=日本聖書信仰同盟機関誌『聖書信仰』
「途上」=思想とキリスト教研究会『途上』
「聖書と教会」=日本基督教団出版局『聖書と教会』
「研究」=日本聖書協会『聖書翻訳研究』
「神学」=東京神学大学神学会『神学』
「翻訳の世界」=日本翻訳家養成センター『月刊翻訳の世界』
「言語」=大修館『月刊言語』
「翻訳」=みき書房『季刊翻訳』
「論集」=日本聖書学研究所『聖書学論集』

A 口語訳聖書に関する論評

中沢洽樹「聖書の翻訳—口語訳聖書の諸問題・最近の邦訳聖書」(山本書店『日本の聖書学』一九六八年。七七—一三一頁および附表二九〇—三〇一頁)

松本卓夫「新約聖書の口語訳について」(『基督教論集』一九五四年。一一六—一二二頁)

左近義慈「和訳聖書の一、二の問題」(「神学」XXX一九六七年。一—三八頁)

麻生信吾「口語訳聖書の問題について」(『日本の神学』一九六四年。一一〇—一一三頁)

浅野順一「口語訳聖書再改訳について」(『日本の神学』一九六四年。一—七頁)
〃　「旧約口語訳について—ヨブ記一・一—五の検討—」(『基督教論集』X一九六三年。九九—一一〇頁)
日本聖書協会「口語新約聖書について」(一九五四年)
〃　「口語旧約聖書について」(一九五五年)

B　新改訳聖書に関する論評

堀川　勇「聖書信仰と新改訳聖書」(いのちのことば社『現代と聖書信仰』一九六九年。一一八—一二九頁)
〃　「新約聖書刊行の経過」(「みことば」一九六六年。三頁)
〃　「新改訳聖書の基本的性格①②」(「聖書信仰」一九六九年。一一月、一二月号)
〃　「定訳に至る過程」(「みことば」一九七〇年。三頁)
〃　「新改訳聖書のテキストについて」(「聖書信仰」一九七〇年)
名尾耕作「聖書に対する二つの態度」(小峯書店『福音主義—現代における聖書』一九六七年。一〇一—一〇六頁)
〃　「旧約聖書の訳語の問題点」(「研究」一九七〇年。二四—三七頁)
〃　「新改訳聖書(旧約聖書)の特色ⅠⅡⅢ」(「ニュース」一九七〇年。六、七、八月号)
名尾耕作「旧約聖書の翻訳を終わって」(「みことば」一九七〇年。四—六頁)
〃　「ヨシュア記四章九節の訳文について」(「ニュース」一九七〇年。二頁)
〃　「旧約聖書の二、三の問題点について」(「ニュース」一九七一年。二頁)
〃　「なぜYHWHをエホバと音訳しないのか」(「ニュース」一九七一年。二頁)
〃　「ヨブ記講解を終えて—ヨブ記の翻訳について—」(「みことばの友」一九七二年。二—三頁)
〃　「新改訳聖書(旧約)翻訳の問題点と方法論」(「聖書と教会」一九七五年。一〇—一四頁)
〃　「ヘブル語聖書(Masoretic Bible)翻訳の一問題」(日本ルーテル神学大学『福音・教会・ルター』一九六八年。一〇三—一二四頁)
〃　「Hebrew Bible Text と死海写本(イザヤ書DSIa)における matres lectionis の問題(Vowel-Letters と Vowel Signs について)」(「途上」一九七〇年。一—一〇頁)
〃　「Masoretic Bible のイザヤ書と死海写本のイザヤ書(DSIa)の対比」(「途上」一九七三年)
松尾　武「聖書のことばは〝神のことば〟—新改訳の第一目標—」(「みことば」一九六六年。四—五頁)
舟喜順一「新改訳聖書の翻訳規定について」(「みことば」一九六六年。一四—一五頁)
〃　「新改訳聖書の訳文について①②③」(「ニュース」一九七〇年九月、一〇月、一一月)
林　四郎『聖書翻訳と現代語』(日本聖書刊行会)
〃　「翻訳聖書の文章」(「みことばの友」一九七二年。二—三頁)
〃　「無理をしない訳」(「ニュース」一九七一年。二頁)
三尾　砂「訳文の日本語について」(「みことば」一九六六年。一三頁)
舟喜順一・名尾耕作・林四郎「新改訳聖書の特色」(一九六九年。日本聖書刊行会)
左近義慈「新改訳聖書—旧約聖書—の翻訳について」(「神学」XXXIV, XXXV 合併号。一九七三年。六一—一一〇頁)
橋本滋男「新改訳聖書の『新約』について」(『日本の神学』X一九七一年。六五—七一頁)

C　共同訳聖書について

日本聖書協会『共同訳聖書について』(一九七五年)
共同訳聖書実行委員会『共同訳聖書の固有名詞の日本語表記—新約聖書—』(一九七六年)
新見　宏「読者のための手引—最近の傾向と共同訳—」(「研究」一九七六年。No.12　二七—三四頁)
中田　実「共同訳聖書に望む」(「研究」一九七五年。No.10　三—八頁)
小泉達人「UBSの聖書翻訳の指針」(「研究」一九七〇年。No.1　四六—五六頁)
生原　優「大衆訳とは」(「研究」一九七四年。No.8　一九—二四頁)
鈴木二郎「敬語をめぐって」(「研究」一九七四年。No.8　二五—二八頁)
堀田雄康「聖書邦訳の新方向＝共同訳聖書について」(「翻訳の世界」一九七七年一月号。一三—一九頁)
〃　「『共同訳聖書』と最近の聖書翻訳」(「研究」一九七六年。No.12　一一—二六頁)
〃　「『心の貧しい人』(マタイ五・三 "οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι")は、幸いであるか—邦訳聖書の一盲点—」(「研究」一九七三年。No.7)
〃　「『イエス』か『イエズス』か—共同訳聖書に関連して—」(「研究」一九七三年。No.6)
宮内俊三「聖書再改訳の途」(「研究」一九七〇年。No.1　五六—五九頁)
B・シュナイダー「人称代名詞の翻訳の問題」(「研究」一九七〇年。No.2　三—六頁)
森岡健二「聖書の翻訳と現代語の表現」(「研究」一九七四年。No.8　三—七頁)
菅野　謙「読む言葉と聞く言葉」(「研究」一九七四年。No.8

八―一三頁）

Z・イエール「固有名詞の表記に関する一提案」（「研究」一九七〇年。No.1　三八―四五頁）

新見　宏「最近の聖書翻訳について―旧約および旧約外典―」（日本基督教学会『日本の神学』一九六九年。八号）

D　翻訳論・言語学関係

E・A・ナイダ著、成瀬武史訳『翻訳学序説』（一九七二年。開文社）

E・A・ナイダ、C・R・テイバー、N・S・ブラネン著、沢登春仁・升川潔訳『翻訳―理論と実際―』（一九七三年。研究社）

E・A・ナイダ著『意味の構造―成分分析―』（一九七七年。研究社出版）

ハイム・ラビン「翻訳としての七十人訳」（「論集」一九六七年。七―二一頁）

関根正雄「古代文献語の翻訳」（「言語」一九七五年六月号。三五―四二頁）

〃　「聖書翻訳をめぐる言語学上の諸問題」（伊藤節書房『聖書とその周辺』一九五九年。五一―七六頁）

ハインツ・クルーゼ「聖書翻訳の問題」（上智大学出版部『伝統と創造』一九六三年）

松田伊作「古代文献語の意味考察―ヘブライ語一動詞群について―」（三省堂『現代言語学』二九九―三一一頁）

藤原藤男『ロゴス・コトバ論』（聖文舎。一九六三年）

前田護郎『ことばと聖書』（岩波書店。一九六三年）

R・A・ブローワー編『翻訳のすべて』（日本科学技術翻訳協会。一九七〇年）

野上豊一郎『翻訳論―翻訳の理論と実際―』（岩波書店。一九三八年）

T・H・セイヴァリー著『翻訳入門―その理念と技法―』（八潮出版社。一九七一年）

中村保男『翻訳の技術』（中公新書。一九七三年）

池上嘉彦『意味論―意味構造の分析と記述―』（大修館書店。一九七五年）

ウオレス・Z・チェイフ著、青木晴夫訳『意味と言語構造』（大修館書店）

「談話分析理論への道」（三省堂『日本語と文化・社会5』一九七―二三三頁）

滝崎安之助「翻訳について」（岩波書店『図書』一九七二年二月。三九―四一頁）

ピエール・ギロー著『意味論―ことばの意味―』（白水社。クセジュ。一九六三年）

ジャン・ペロ著、高塚洋太郎他共訳『言語学』（白水社。クセジュ。一九七三年）

トラッドギル著、土田滋訳『言語と社会』（岩波新書）

魚返善雄『言語と文体』（紀伊国屋新書。一九六三年）

J・M・マリー著、渡辺美智子訳「英語聖書の荘重体」（八潮出版社『文体の問題点』一九七六年。二四〇頁―）

柳父　章『翻訳語の論理―言語にみる日本文化の構造―』（法政大学出版局。一九七二年）

〃　『翻訳とはなにか―日本語と翻訳文化―』（法政大学出版局。一九七六年）

〃　『翻訳の思想―「自然」とNATURE―』（平凡社選書。一九七七年）

常葉謙二「ルターの言語観―彼の聖書翻訳論を通して見たる―」（『四国学院大学論集15』一九六九年）

ウイレム・J・コーイマン著『ルターと聖書』（聖文舎。一九七一年）

W・A・グロータース、柴田　武「聖書にも『誤訳』があるか―言語学者の目から―」（「聖書と教会」一九七五年。「翻訳の世界」一九七七年）

W・A・グロータース、柴田　武『誤訳―ほんやく文化論―』（三省堂新書。一九六七年）

宮内俊三、ガントレット、松尾武、K・マクビティ、大江信座談会「聖書の翻訳問題をめぐって」（いのちのことば社『福音ジャーナル』一九六五年。一〇―一四頁）

中村和夫「ブームにのる聖書翻訳」（ヨルダン社『聖書教育』一九七六年七月号。一九―二一頁）

新見宏、名尾耕作、高本康生座談会「聖書の翻訳①②」（ヨルダン社『聖書教育』一九七六年八月号、九月号）

榊原康夫「人のことばと神のことば」（「言語」一九七二年一二月号。四三―五〇頁）

〃　「聖書翻訳における今後の課題」（「ニュース」一九七一年三月。一頁）

舟喜順一「聖書翻訳のむずかしさ」（「研究」一九七〇年。No.2　二三―三〇頁）

〃　「聖書翻訳と教会」（「聖書信仰」一九七〇年一一月。二―三頁）

〃　「翻訳と辞典」（「みことば」一九七〇年。七頁）

〃　「翻訳聖書の権威について」（「みことばの友」一九七三年四月。二―五頁）

J・B・フィリプス著、平野保訳『聖書はわたしを裏切らない―聖書翻訳者の証言―』（教団出版局。一九六八年）

木下順二「聖書の翻訳をめぐって」（「研究」一九七五年。No.11　三―一一頁）

山本七平「翻訳は神学である①―⑤」（「翻訳の世界」一九七七年一月、四月、五月、六月、七月）

佐伯真光「翻訳は神学にあらず―山本七平説批判―」（「翻訳の世界」一九七七年三月）

〃　「山本似而非神学批判①②」（「翻訳の世界」一九七七年八月号、九月号）

磯谷　孝「翻訳原論、了解としての翻訳、創造のための翻訳—翻訳理論の出発点—《連載》第一回」（「翻訳の世界」一九七七年九月号。四〇—四五頁）
高橋　虔「新約異文の比較研究①—③」（「研究」一九七〇年、一九七一年、一九七二年）
〃　「聖書新訳の諸問題」（「研究」一九七〇年。No.1 四—二三頁）
〃　「文語改訳マルコ伝の序文」（「研究」一九七二年。No.4　五七—五九頁）
〃　「新約における第三人称命令法①②」（「研究」一九七三年五月、一〇月No.6 No.7）
中沢洽樹「最近の翻訳に見るイザヤ書五三章一一節」（「研究」一九七二年。No.5　三九—四六頁）
〃　「続・最近の翻訳に見るイザヤ書五三章一一節」（「研究」一九七四年。No.8　一四—一八頁）
〃　「国際旧約学会に出席して」（「研究」一九七五年。No.10　九—一三頁）
中村和夫「ギリシャ語構文の図解分析について—ギリシャ語原典の文法的理解のための一試案—」（「研究」一九七二年。No.5　一八—三八頁）
高橋重幸「ヘブライ詩における音の要素とその翻訳—ひとつの試論—」（「研究」一九七二年。No.5　三—一七頁）
〃　「ローマ・カトリック教会聖務日課（礼拝）用詩編の翻訳について」（「研究」一九七二年。No.4　一五—二六頁）
加藤邦雄「聖書訳語による語義の屈折」（「研究」一九七〇年。No.2　七—一八頁）
星野　清「マルコ福音書翻訳ノート」（「研究」一九七一年。No.3　三—一九頁）
木下順二「パウロにおける所有格の訳し方について」（「研究」一九七一年。No.3　二〇—二六頁）
松下治三郎「新約聖書翻訳と釈義について」（「研究」一九七二年。No.4　三—一四頁）
菅沼英二「エレミヤ書翻訳の諸問題」（「研究」一九七三年）
左近　淑「TEV旧約聖書翻訳の輪郭—TEV（旧約）委員会に出席して」（「研究」一九七五年。No.10　一四—二二頁）
Z・イエール「最近数年間におけるフランス語聖書の翻訳と出版」（「研究」一九七五年。No.11　一二—一七頁）
岸　千年「聖書翻訳をめぐって」（「研究」一九七二年。No.4 四〇—四七頁）
浅野順一「旧約聖書における『ことば』」（「言語」一九七二年一二月号。二—一〇頁）
前田護郎「沈黙について」（「言語」一九七二年一二月号。一九—二八頁）
熊沢義宣「現代神学におけることば」（「言語」—一九七二年一二月号。二九—三六頁）
関根正雄「聖書の言語の構造」（「言語」一九七二年一二月号。

一一—一八頁）
常葉謙二「聖書翻訳者研修会報告」（小峯書店『福音主義—現代における聖書』一九六七年。一〇七—一一二頁）
荒木　亨「聖書の一読者として」（「言語」一九七二年一二月号。三七—四二頁）

E　聖書翻訳の歴史

日本聖書協会『聖書協会一〇〇年の歩み』（一九七五年）
〃　『日本聖書協会一〇〇年史』（一九七五年）
海老沢有道『日本の聖書—聖書和訳の歴史—』（日本基督教団出版局。一九六四年）
〃　「聖書和訳史補遺」（「研究」一九七六年。No.12 三—一〇頁）
K・E・アウレル「聖書和訳の歴史と聖書協会」
田中豊次郎『聖書成長史話』
門脇　清『日本語聖書翻訳史』
豊田　実『バイブル邦訳の歴史』
佐波　亘編『植村正久と其の時代』四巻
藤原藤男『聖書の和訳と文体論』（キリスト新聞社。一九七四年）
笹淵友一「聖書和訳とその文学的影響」（明治書院『浪漫主義文学の誕生』一九五八年。三六五—三九八頁。岩波『文学』一九五六年）
海老沢有道「最初の邦訳聖書—ギッツラフ訳『約翰福音之伝』—」（「翻訳の世界」一九七七年一月号。二〇—二四頁）
新見　宏「波上の眼鏡—ベテルハイムによせて—」（「研究」No.11　一九七五年。二六—二九頁）
矢崎健一「中国語聖書翻訳小史」（「研究」No.4　一九七二年。二七—三九頁）

F　日本語の問題について参考になるもの

関根正雄「ヘブライ語と日本語のズレ」（「聖書と教会」一九七五年九月号）
築島　裕「聖書の日本語について」（「研究」No.3　一九七一年。二七—三二頁）
永野　賢「聖書翻訳のための日本語」（「研究」No.2　一九七〇年。一九—二二頁）
福井芳男「日本語と外国語」（NHK市民大学叢書31『言語・人間・文化』滝田文彦編）
大野　晋『日本語を考える』（読売新聞社。一九六八年）
〃　『日本語をさかのぼる』（岩波新書）
〃　『日本語の起源』（岩波新書。一九五七年）
〃　編『対談—日本語を考える—』（中央公論社。一九七五年）
見坊豪紀『辞書をつくる—現代の日本語—』（玉川大学出版部。玉川選書。一九七六年）

柴田　武編『ことばの意味―辞書に書いてないこと―』(平凡社選書。一九七六年)
川本茂雄『ことばとこころ』(岩波新書。一九七六年)
金田一春彦『日本語』(岩波新書。一九五七年)
西尾　実『日本人のことば』(岩波新書。一九五七年)
鈴木孝夫『ことばと文化』(岩波新書)
丸谷才一『日本語のために』(新潮社。一九七四年。第二章「未来の日本語のために」六八―八四頁。口語訳の文章批判)
外山滋比古『日本語の個性』(中公新書)
関根文之助「聖書のことばと国語生活」(「聖書と教会」一九七五年)

その他、日本語に関する書物は数多くあるが、紙幅も尽きたのでここまでにしておく。

(日本聖書刊行会主事)

宣教学関係

――一九五〇年以後の動向を中心に――

中島　守

今年は実践神学の分野で文献紹介をするようにとのことである。そこで表記にそって宣教学関係の紹介をさせて頂く。

宣教学は極めて若い学科である。最近でこそ耳なれた語となったが、つい二〇年前まではその名称さえ日本では一般化していなかったといえる。G・アンダーソンが一九五一年のある宣教師の言葉として書いているように、「われわれがいざ宣教に向かわんとして宣教の神学に関する資料を神学校の図書館に求める時、われわれはほとんど空くじをひくような結果になる」。その状況は今日の日本の神学校でも大差ないように思われる。特に宣教学関係の日本語の文献の貧困ははなはだしい。欧米では一九五〇年代からこの関係の出版が活発化し、特に最近では宣教学関係の書物や誌類はおびただしい数にのぼっている。それは宣教学が「福音と世界」「教会と世」に関するあらゆる領域に関わるものである以上、よほど特殊な研究でない限り宣教学の関心の対象とならないものはないといっても過言ではないという状況による。

よい機会であるので少し古いものも含めて紹介することとする。

さて、「伝道は教会の使命」ということは今日では一応受け入れられているようである(とはいっても、この問題の定義をめぐって今も論議が続けられている訳である)が、近代宣教運動の起り以来、今世紀に入るまで伝道(海外伝道)は諸宣教団体の仕事と考えられてきた。

今世紀初頭の諸会議、特に一九一〇年のエジンバラ会議と世

界宣教連盟(IMC)の発足、そしてIMCによる数度の宣教会議は「教会」と「宣教団体」との対話を深め、一九四八年の世界教会協議会(WCC)の成立と、その後のWCC、IMC内における神学的討論の結果として、一九六一年ニューデリーにおけるWCC第三回総会においてIMCはWCCと合併し、WCCの一部局(DWME)となったことは周知の通りである。

その間、IMC、WCCの数多くの会議は多くの神学的問題を提起してきた。(これに関しては、G・アンダーソン編、土居真俊編訳『福音宣教の神学』(日基教団出版局。一九六九年)の中にアンダーソンによる良いまとめがある。原著は *The Theology of the Christian Mission*, 邦訳では歴史的研究の三章はじめ全部で七章が訳出されていない。特に J. Blauw の "The Biblical View of Man in His Religion" が訳出されていないのは残念である。)それらの討議の中で強く要請せられてきたのが「宣教の神学」の確立であった。

実に今世紀は「宣教学」の時代の観がある。石田順朗氏がその好著『教会の伝道』(聖文舎、一九七二)の中で指摘しておられるように、「宣教学が単なる一分科としてよりも全神学作業の『機能的性格』(diachonological)を持つものとして取り扱われるのは最近の傾向であろう」。今日、宣教学に、あらゆる神学領域を統合する機能が期待せられているとの自覚は、宣教学の思い上りとしてではなく責任の自覚として大切な事である。

石田氏が指摘する如く、「神―世界―教会」か「神―教会―世界」かの論争は今日の宣教学の大問題であり、これをめぐって自由派(Liberals 又は Eccumenicals 最近では Conciliars)と保守派の論争が一九一〇年以来続けられてきたといっても過言ではない。そしてWCCとIMCの統合はその初期よりIMC内部においてさえその方向に危惧を抱いていた者たちがいたのであるが、近年その危惧はWCCの左傾化と共に更に具体化しつつあるといえる。

神学界も世界思想の流れと無縁ではない。二〇世紀初頭よりの唯物論、汎神論、ヒューマニズムの影響は深く神学の世界にも浸透している。この線にそって宣教との関連において奨めたいのは、H. Lindsell, *Evangelical Theology of Missions*, Zondervan, '70(これは *Christian Philosophy of Missions*, '49 の再版)である。また現代福音派の代表的神学者の一人、F・シェーファーの一連の著作(四冊が邦訳されている)もよい参考となる。

このような状勢の中で福音派は一九〇〇年のニューヨークから、一九六〇年シカゴ以来、フィートン、フランクフルト、ベルリン、そして先年のローザンヌと重要な伝道会議を開いて宣教の何たるかを追求してきた。そしてその動きは、特にWCC、IMC合併以来自由派(協議会派)と福音派との対決の形で近年とみに表面化している。

まず、五〇年代後半までの文献集を紹介しておこう。Ander-

son, G.H., ed., *Bibliography of the Theology of Missions in the 20th Century*, Missionary Research Library, N.Y., '58. Morris, R.P., *A Theological Book List*. IMC, '60. 残念ながら福音派による独立した文献集はまだないが、*Mission Handbook*, North American Protestant Ministries Overseas が一九六八年の第八号以来 World Vision から出されるようになり、その中に文献紹介が多数納められている。

六〇年代に入ると両陣営から宣教の神学に関する多くの本が出されている。紹介したい数冊を挙げると、H. Bavinck, *An Introduction to the Science of Christian Missions*, Presbyterian Reformed Pub., '60. 一九五四年にオランダ語で書かれたものの英訳であるが、宣教学の何たるかを問題の所在よりはじめて、手際よくまとめておりテキストに適している。J. Blauw, *Missionary Nature of the Church*, McGraw-Hill, '62. 聖書神学の立場から教会の宣教的性格を追求した古典的名著である。大方にお奨めしたい。B. Sundkler, *The World of Mission*, Lutterworth, '63 (E.f. '65). 著者はウプサラ大学の宣教学教授で、福音ルーテル教会タンザニア監督であった。福音と文化(環境)に重点を置いて書かれており、長年の宣教師としての目から書かれた良い書物である。Boer, Harry R., *Pentecost and Missions*, Lutterworth, '61 (Eerdman, '64). 著者は米国キリスト改革派教会のナイジェリア宣教師で神学校教授。本書は彼の学位論文であるが、宣教と宣教至上令、聖霊との関係の興味ある研究である。C.F. Henry & S. Mooneyham, ed., *One Race, One Gospel, One Task*, World Wide, '67, 2 vols. ベルリン世界伝道会議の公式資料であり、福音派の宣教理解を概観することができる。

両派の対決は一九六八年WCC第三回大会ウプサラ以来更に明確化し、その影響は日本などに於ても無視できないものがある。学園紛争が世界的規模に於て吹き荒れたのもその前後であり、日本に於て教会紛争が数多くの教派教団をゆすぶったのもその直後であった。(七〇年の万博闘争はウプサラ神学の実験台の観がある。) それはいわゆる「社会派」と「教会派」の論争であり、その背景に協議会派と保守的福音派の「今日における救い」に関する神学的立場の相違が深く影響しているのを見逃すことはできない。従来もそうであったが、今日は更に、教派を問わず教会が大きく二つの立場に分れているのを見る。今日教派名はもはや従来のようなアイデンティティを持たなくなっている。それはとりもなおさず「教派とは何か」「教会とは何か」が真剣に問われていることの反映である。このような世界的状況の中で、福音派も自らの宣教論の確立を模索しているというのが現状である。

更に七〇年代に入ると宣教学関係の書物の出版はその速度を

増し、福音派のものも数多く出されている。訳書も含めて邦文では、『伝道の神学とその展開』(藤田昌直編監、いのちのことば社、一九七〇年)。これはシカゴからシンガポールまでの福音派による伝道会議の主要な講演の収録である。『宣教に生きる教会—都市化時代の教会構造』(G・ウェーバー著、柴田訳、聖文舎、一九七三年)。副題が示す通り社会学的アプローチをしている。『日本をキリストへ』(日本福音同盟、いのちのことば社、一九七四年)。去る京都における日本伝道会議の公式資料である。今日の日本の福音派を一応網羅して、一応の水準を保っている。『宣教のめざす道』(バイヤーハウス著、岩井、鍋谷共訳、いのちのことば社、一九七三年)。小冊子ではあるが両派に精通する著者が両派の相違点を福音派の立場から簡潔に、しかし告発的にまとめている。教職信徒共に一読を奨めたい。なお同著者は、*Bangkok '73*, *The Bigining or End of World Mission?*, Zondervan, '73 で協議会派宣教論の持つ問題点を鋭く指摘している。また、R. Winter, ed., *The Evangelical Response to Bangkok*, Win Carey Library, '73 も加えておきたい。更に英文では G. Peters, *A Biblical Theology of Missions*, Moody Press, '72. ディスペンセイショニストと承知の上で読むと、それなりに有益な福音派の宣教論である。Elton Trueblood, *The Validity of the Christian Mission*, Harper & Row, '72. は個人の救いが社会変革に先行することを明確に主張する。そして去る七四年のローザンヌ伝道会議の公式資料集、J.D. Douglas, ed., *Let the Earth Hear His Voice*, World-Wide, '75. とジョン・ストット『ローザンヌ誓約、解説と註釈』(いのちのことば社、一九七六年) は、昨年も宇田師が紹介しておられるが、再度挙げておきたい。

更に両派の論争を収録した好資料として、Anderson, Stransky, ed., *Mission Trend*, No. 1 "Crucial Issues in Mission Today," No. 2 "Evangelization," No. 3 "Third World Theology." Paulist Press が七四年から次々に出されており、カトリックを含めて幅広い論文が収められている。No. 4, No. 5 が出版予定されている。D. McGavran, ed., *The Conciliar-Evangelical Debate: The Crucial Documents*, '74-'76, Win Carey Library, これは同編者による好著 *Eye of the Storm*, '72 の増補版である。D. McGavran, *Crucial Issues in Missions Tomorrow*, Moody, '72, P. Wagner, *Church-Mission Tensions Today*, Moody, '72 も加えておきたい。また宣教論を志す者のみでなく広く伝道にたずさわる者のよい助けになると思われるものに、Neill, Anderson, Goodwin, ed., *Concise Dictionary of the Christian World Mission*, Lutterworth, '71 がある。執筆者は二四〇名に及び、それぞれの担当分野における専門家を集めている。取扱われている項目も「宣教の神学」から、世界各国の宣教状況、伝道史上の主要人物、現代宣教学上の主要項目、さらに世界の諸宗教にまで及んでおり、各項目には数冊

の主要文献が挙げられているので大変便利である。

宣教史に関しては、L.S. Latourette のものはあまりにも有名であるが、小冊でよくまとまっているものに、S. Neill, *History of Christian Mission* (Pelican History of the Church, 6) Penguin, '64 がある。彼はこの前に Ruth Rouse と共編で、*A History of the Ecumenical Movement, 1517–1948*, S.P.C.K., '54, '67 を出している。大冊でレファレンス・ブックの観がある。文献表も五〇頁をこえている。R.H. Glover, *The Progress of World-Wide Missions*, Harper & Row, '24 が、H. Kane によって六〇年に増補再版されている。P. Scharpff, *History of Evangelism*, Eerdman, '64 はベルリン会議に寄せて出版されたものであり近代宣教運動の直前頃から記述しているが、近代宣教史を概観するのに適している。日本語でのこの種のものに不足していると思っているところに、この四月に、メンデル・テイラー著、小出、瀬尾、山崎、牟代共訳『伝道の歴史的探求』福音文書刊行会が出された。内容は伝道史というより表題の示すように、伝道を押し進めてきた歴史上の諸運動を中心にまとめられた一種の宣教論である。伝道の定義に始まり、終章に「伝道の神学」が収められているのも全体のまとめの役割りを果している。

最近一つのブームとも言える状況を呈しているのが教会成長論である。まず斯界の大御所 D. McGavran, *Understanding the Church Growth*, Eerdman, '70. 教会成長論の定義と原則を明らかにする。批判の向きもあるが一読の要がある。邦訳の計画があると聞く。小冊ではあるが充実したものに A. Tippet, *God, Man and Church Growth*, Eerdman, '73 がある。Tetsunao Yamamori, *Church Growth in Japan*, a study in the Development of 8 Denominations, 1859–1939, Wm Carey Library, '74. これは著者の学位論文であるが、日本における伝統的七教派と、それに比べて急速な成長を記録したホーリネス教団の比較から、日本における教会成長の可能性をさぐっている。日本人の手によるこの種の分析的研究の初めとして興味がある論文である。D. Hoke, ed., *The Church in Asia*, Moody, '75 は我々になじみ深いホーク師の、ローザンヌ伝道会議事務局長の経験と知識をふまえてのアジア全域の教会に関する集大成である。ペルシャ以東の二六ケ国を網羅し、教会成長の視点から、一九六〇～七〇年の統計に基づいてよくまとめられており、広い意味での各国の現状紹介の観がある。日本については特に二章がさかれている。また各国についての文献が数冊ずつ挙げられているので有益である。

このほか、宣教論の領域で他宗教と異端に関するものを挙げねばならぬが今回は割愛せねばならぬ。

最後に誌類についてふれておこう。

発行順に見ると、まず *International Review of Mission*, IMC, 1913～. しかしウプサラ直後の一九六九年四月号から "mission" の "s" を落した頃から内容にも大きな変化を来し、現在では協議会派の代弁的機関誌であるが、英、独、仏、蘭など各国の主要な文献紹介がのせられている。*Occasional Bulletin of Missionary Research*, Overseas Ministries' Study Center, 1928～. 数度の変遷を経て、今年一月から上記より新版第一号として出されるようになった。G.H. Anderson の編になり、幅広く価値ある雑誌にもどる可能性がある。第一号にはアンダーソンによる、北米の神学校図書館が保有すべき代表的雑誌類三〇種のリストがのせられている。（その中に *The Japan Christian Quarterly*, *The Japan Missionary Bulletin*, *Japanese Religions* の三誌が挙げられている。）*Missiology: An International Review*, 五三年より *Practical Anthropology* として出されていたが、七三年に現名に変り、福音派の季刊紙として信頼できる情報源である。*Evangelical Missions Quarterly*, Evangelical Missions Information Service, '64～. EMISの総主事は昨年教会成長セミナールで来日されたガーバー師である。主張、論評と共に毎号世界宣教ニュースをのせている。*Church Growth Bulletin*, Overseas Crusades, '64～. 創刊より McGavran 編集の隔月誌である。小冊ながら毎号タイムリーな興味ある記事をのせている。

本稿を脱稿しようとしていた八月初めに、筆者の手許に、米国での筆者の主任教授で、現在北米の Association of Professors of Missions の会長である Dr. Frank J. Kline より、Boberg, Kline, compiled, *Bibliography: Most Significant Books on Mission Since 1970* のタイプ・コピーがとどいた。アンケートに答えた二四名の宣教学教授達により二〇四冊の書が挙げられており、そのうち一〇名以上によって奨されたものが別記してあるので参考までに記しておく。（　）内は推薦人数。

(10) Boberg, John T., and Scherer, James. *Mission in the '70's*. Chicago Cluster, '72. (10) Tippet, Alan R., *God, Man and Church Growth*, (12) Neill, Anderson, Goodwin, eds., *Concise Dictionary of Christian World Mission*, (12) Costas, Orlando E., *The Church and It's Mission: A Shattering View From the Third World*, Tyndale, '74, (13) McGavran, *Eye of the Storm: The Great Debates in Mission*, (14) Anderson, Stransky, *Mission Trends, No. 1.*

（大阪基督教短期大学助教授）

日本福音主義神学会活動報告

◎一九七三年四月三〇日　於中央福音教会
○シンポジウム
「日本伝道と日本人の思惟構造」　小畑　進、西川重則、前田栄三各師
○講演会
「イザヤ40―55章全体より見た主のしもべの像」鍋谷堯爾師

◎一九七三年一一月一九日　於東京恩寵教会
○研究発表会
(1)「エステル記とヘロドトスの『歴史』」　大山武俊師
(2)「新聖書註解」新約全三巻について　村瀬俊夫師
(3)「バックストンの流れを汲む聖化の理論」　工藤弘雄師
(4)「ことば刺激とからだ」　山田昭和師
(5)「日本宣教の宗教学及び教育学的考察」　稲尾三活師
○講演会
「ウェスレー神学の現代的意義」　山崎鷲夫師

◎一九七四年四月一五日　於東京恩寵教会
○シンポジウム
「今日における救い」　山口　昇、泉田　昭各師
○講演会
「抵抗権――宗教改革史上の一考察」　丸山忠孝師

◎一九七四年一一月一八日　於中央聖書学校
○研究発表
(1)「マタイ5章21―26節の伝承史的研究」　内田和彦師
(2)「イスラエルを垣間みて」　田辺　滋師
(3)「ローマにおける本来の宗教意識――皇帝礼拝との関連において」　湊　晶子師
(4)「教会成長における神学校の場」　L・ピーターソン師
○合同レポート
(1)「日本伝道会議の神学的側面」　村瀬俊夫師
(2)「世界伝道会議の神学的側面」　宇田　進師
○講演会
「教会と国家」　山中良知師

◎一九七五年四月一四日　於中央福音教会
○シンポジウム
「説教と新約聖書テキスト」　グリンリー師
○講演会
「カナンの文化・宗教と旧約聖書」　津村俊夫師

◎一九七五年一一月一〇日　於エバンゼリンホール
○シンポジウム
(1)「最近の旧約聖書研究の文献紹介」　鈴木　昌師
(2)「創世記記者の歴史の扱い方」　舟喜　信師
(3)「列王記上1―11章に見るソロモン――その釈義的一考察」　服部嘉明師
(4)「ゼカリヤ書の著者問題について」　千代崎秀雄師
(5)「出エジプト記の諸問題――とくに出エジプトの年代問題が提起するもの」　西　満師
○講演会
(1)「最近の新約聖書研究の文献紹介および共観福音書問題と霊感論」　村瀬俊夫師
(2)「コロサイ1章15―20節および2章9節におけるキリスト論の展開」　丹羽　喬師
(3)「ヘブル書1―6章に見る構造について」　宮村武夫師

◎一九七六年四月一九日　於中央福音教会
○シンポジウム
「知恵文学と説教」　安田吉三郎、本間正巳各師
○講演会
「〈み霊の実〉と人の性格の問題」　小助川次雄師

◎一九七六年一一月八日　於東京恩寵教会
○シンポジウム
「日本語訳聖書の沿革と問題点」
服部嘉明、安田吉三郎、松村悦夫、大島義隆各師
○講演会
「日本語訳聖書を考える」　榊原康夫師

◎一九七七年四月二五日　於同盟中野教会
○シンポジウム
「今日の福音主義教会の現状分析と提言」
有賀　寿、臼井　弘、中沢啓介、松木祐三各師
○講演会
「〈聖書は誤りなき神の言葉〉とはどういうことか」
宇田　進師

（以上ですが、一九七六年一一月以降は、東部部会活動になります。）

西部部会活動報告（概略）

◎一九七一年一一月二二日　於大阪扇町教会
○研究発表会
(1)「パウロにおけるエン・クリストオの用法について」　村上　久氏
(2)「二重予定説の問題をめぐって」　橋本龍三氏

◎一九七三年二月一九日　於神戸ルーテル聖書学院
○研究発表会
「初期アウグスチヌスにおける信仰」　村上　満氏
○シンポジウム討論会
「説教をめぐって」　吉岡　繁氏、中島　守氏（発題）

◎一九七三年三月二六日　於神戸ルーテル聖書学院
○研究発表会
「旧約聖書からの説教」　安田吉三郎氏
○シンポジウム討論会
「説教の本質」　中島　守氏、吉岡　繁氏（発題）

◎一九七三年五月二一日　於大阪扇町教会
○講演会
「今日の神学的状況における聖書と伝承の意味」
カール・ヴィスロフ氏

◎一九七三年一一月二三日　於神港教会
○研究発表会
(1)「主の晩餐とその制定語と初代教会における歴史の考察」　村上　久氏
(2)「キリスト教々育カリキュラム作製における一例」　谷口泰造氏
(3)「聖書的規範倫理についての序論的考察」　高力弘一郎氏
○講演会
「民とその王（権威なき権威の美しさ）」　服部嘉明氏

◎一九七四年五月一三日　於垂水教会
○研究発表会
(1)「ダルマとロゴスの周辺――その比較思想論的展開」　久保田周氏
(2)「農村伝道と都市伝道の諸問題」　開出　寛氏
○講演会
「聖書的基盤に立った情況の倫理の評価」　松田一男氏

◎一九七四年一一月一九日　於大阪扇町教会
○シンポジウム

「ローザンヌ伝道会議をめぐって」
中島　守氏、M・ソルフス氏、丸山忠孝氏
○講演会
「教会に告げなさい」　丸山忠孝氏

◎一九七五年五月一九日　於神戸ルーテル聖書学院
○研究発表会
(1)「フランスのキリスト教会の情況」　森川　甫氏
(2)「トーマス・ミンツァーの神学」　稲葉礼野氏
(3)「ロシア教会史の概観と十七世紀における教会改革」　安村仁志氏
○講演会
「私たちと新約聖書本文」　ハロルド・グリーンリー氏

◎一九七五年一二月一日　於大阪クリスチャン・センター
○研究発表会
(1)「新約ギリシア語の前と後」　織田　昭氏
(2)「言語学的考察から導入出来る翻訳原理について」　真鍋　孝氏

◎一九七六年五月二四日　於関西学院大学
○研究発表会
(1)「バルト神学を見なおす」　藤江幸雄氏
(2)「近代神学における啓示の意味」　春名純人氏
○講演会
「最近の終末論々議」　宇田　進氏
（この同じ講演会を二十五日京都福音自由教会及び二十六日尼崎教会でも開いた。）

◎一九七六年一一月二九日　於神戸ルーテル聖書学院
○研究発表会
(1)「ウエスレーの聖餐論（その歴史的系譜をめぐって）」　岩本助成氏
(2)「カルヴァンの聖餐論」　金田幸男氏
○講演会
「世俗主義との戦い（北欧を事例として）」　カール・ヴィスロフ氏

◎一九七七年四月二九日　於大阪基督教短大
○研究発表会
(1)「愛の再検討（教会における人間関係の調整）」　堀越暢治氏
(2)「ルカの行伝演説配置の手法」　石丸　新氏
○講演会
「福音主義教会における教会音楽とその歴史」　前川金治氏
（以上、主として研究発表と講演会活動の報告）

山中良知先生の信仰と学問

春名純人

敬愛してやまなかった当神学会理事、山中良知博士が、主の測り知ることのできない深い聖旨によって六月三日早朝、突然、主の御許に召されました。先生はキリストの御許に召されたのですから、望みなき異教徒のように嘆き悲しむことは不信仰でありますが、しかし、この地上生涯で共に主に仕えてきた者にとっては大きな衝撃であり悲しみであります。また、栄光をただ神にのみ帰すべき私たちにとって、故人をいたずらに讃美することは不信仰でありますが、しかし、神が賜物を豊かに授けられた器を起し、その器を通して聖書の真理の高さ深さを教え、心から喜んで主に仕えることがどのようなことであるかを教えられたなら、神のなし給ひた御業を無視するところに祝福はありません。同じ編集者の村瀬先生から一文を書くようにとの依頼を受け、山中先生と親しく共に歩んだ者として、先生が終始一貫強い召命意識をもって証しされていた事柄に注目することは有意義なことと思い、この拙い文を綴ることにしました。先生が召されたことによって、先生のお書きになったものやその主張を凝視して、多くの人がその意義を認めてその継承発展の努力に心を燃やされるなら、それは新たなる恵みです。

山中先生は大正五年に広島県の呉市でお生れになり、旧制の高知高等学校に在学中に旧日本基督教会の高知教会において多田素牧師から洗礼を受けられてキリスト者となられました。昭和十五年旧制の京都大学文学部哲学科に入学

されましたが、五年以上にわたる陸軍の応召生活とシベリヤ抑留のため、卒業されたのは戦後の昭和二十三年でした。専攻はキリスト教哲学でありましたが、神戸改革派神学校の予科教授であられた若き日に神学を学ばれ、昭和三十年から一年二ケ月アムステルダム自由大学に、また比較的最近のことでありますが（昭和四十六年―四十七年）カンペン改革派神学大学に留学され、豊かな改革派神学の伝統を継承されつつキリスト教哲学の研究に生涯を捧げられました。日本カルヴィニスト協会会長として非常に厳密な意味でのカルヴァン主義哲学者でありましたが、しかし、日本のような異教国においては、真に、イエス・キリストを主と告白し、聖書を神の言葉と信じ、聖言を唯一の絶対的な規範として立つ福音主義教会の協力の特に必要であることを認識され、日本福音主義神学会の理事も引受けて下さって諸活動に協力して下さいましたし、その活動は広く他派の神学校の講義や教会の特別集会の講師としての奉仕にまで及び、その証しのための足跡は韓国の神学校や遠くノルウェーの教会にまで及んでいます。昭和二十五年に四国キリスト教学園（現四国学院大学）の創設と共に哲学教授として赴任されましたが、昭和三十五年に関西学院大学社会学部に招聘され、召される日まで社会倫理学の教授として、キリスト教哲学に基づいた緻密な有神論的社会倫理学の建設を目指して研究に打ち込まれました。また、学生たちをよく教育指導されて、多くの学生に信仰的な深い感化を与え、教会へ導かれ、また、教会関係の学生たちには聖言に基づく有神論的な学問の追求を情熱を傾けて伝授されました。私はあのように学生たちに慕われる教師を見たことがありません。きっと先生が学生たちを深く愛されたからでありましょう。教会においては、日本基督改革派神港教会長老として、田中剛二牧師を尊敬し、よく助けて長老としての務めを果され、また神戸改革派神学校の教師としてキリスト教哲学を担当されました。

先生はこのような方でありましたが、日本福音主義神学会のために貢献して下さいました点について申し上げますと、まず、昭和四十六年以来、理事をつとめていて下さいました。また、昭和四十九年十一月十八日には東京で「教

会と国家」の問題について学会主催の公開講演をして下さいました。また、『福音主義神学』第六号に「日本人の思惟構造と福音宣教の伝道方法」という題の論文をお書き下さり、また第四号には書評を一篇お書き下さっております。（また第五号には先生の訳業についての村川教授の書評が掲載されております。）また西部理事会においては独特のユーモアを交えた鋭い意見によって多くの示唆と啓発を常に与えられ、さまざまな制約や困難の中に活動を続けている西部部会の活動を支援され、特に講演会の開催などについて多くの便宜を計って下さいました。

さて、ここで、多くの学会員諸氏が先生の著述をこの際にまとめてお読み下さってその強い主張に耳を傾けて下さることが、日本の福音主義教会にとって測り知ることのできない大きな益となることを確信いたしますので、その便宜のため一読をお奨めしたいもののリストを掲載いたします。

①「理性と信仰」（創文社・昭和三十九年）

これは、今では手に入らないと思います。古本屋で探して頂いて保存されますと、折にふれて読み返すごとに多くのことを新たに教えられる名著です。先生はこの書物の改訂版を出す志を立てられまして、一昨年の夏休みに第一章「キリスト教哲学の根本問題」の第一節「キリスト教哲学の可能性について」の部分の改訂草案を書いておられました。この草案は、近く「改革派神学」第十三輯の先生の特集号に掲載される予定です。その内容は㈠「理性と信仰の被造性」、㈡「堕罪における理性と信仰（イ）」、㈢「堕罪における理性と信仰（ロ）」、㈣「新生における理性と信仰（イ）」、㈤「新生における理性と信仰（ロ）」です。

②「宗教と社会倫理」（創文社・昭和四十五年）

第一章の「聖書における倫理とその意味」が特に有益です。

③「儒学・蘭学の伝統と近代化の特質」（高橋幸太郎編「日本近代化の研究（上）」所収・東京大学出版会・昭和四十七年）

これは、前記「福音主義神学」誌掲載の「日本人の思惟構造と福音宣教の伝道方法」の論文の主張の背景になっている先生の研究です。

④「聖書における労働の意義」（日本基督改革派教会西部中会文書委員会刊・現代とキリスト教 小論叢書第四号・昭和四十九年）

この論文の一読を特にお奨めしたいと思います。売切れて品切れになっていますが、前記「改革派神学」の特集号に再録の予定です。

⑤「カルヴァンの『キリスト教綱要』における神認識と自己認識について―有神的認識論序説―」（「改革派神学」第十二輯・神戸改革派神学校・昭和五十一年）

この論文は①の「理性と信仰」に続けてお読み頂くとよく理解できると思います。

⑥スキルダー著・山中良知訳「キリストと文化」（すぐ書房・昭和四十九年）

これはオランダの改革派の神学者スキルダーの著書の先生の手によるオランダ語からの翻訳です。スキルダーは先生が非常に尊敬しておられた方であり、この書の主張は先生の思想に対する影響のある主張です。なんとかして、この主張を日本の教会に伝えたいという情熱のあふれる要約と解説が先生の手によってこの訳書の第一部として付けられています。

先生のお仕事はキリスト教哲学でありましたが、そのうち、一つの強い関心は聖書的思惟、有神論的思惟の確立ということでありました。先生はこれをまず、礼拝と労働という二大命令に対応する二大認識能力としての信仰と理性の問題として捉えられました。①と⑤をよく読んでみますと、この問題について先生は三つの立場を原理的に排除しておられると思います。

退けられるべき第一の立場は、罪によって失ったものを超自然的付加的恩寵に限定して、罪による堕落腐敗の影響を理性の機能には原理的には認めない立場です。恩寵が自然を完成する「自然と恩寵」のスコラ的二元論の立場で、

異教哲学の主張をも、不完全ではあるが啓示的真理と同質の真理として承認して、信仰と自然的理性の綜合の立場となります。

第二の立場は、近代哲学的認識論とこの上に立っている近代神学の立場です。理性は自然認識の領域では悟性として因果性の範疇を自然の未解釈的事実に付与しながら法則性を確認していく立法者となり、自然の世界から一切の宗教性、聖定的要素、信仰的契機を駆逐し、道徳の領域でも意志（実践理性）として道徳法則の付与者となり、宗教はこの道徳を神話的象徴をもって助ける位置に陥ってしまいます。これは近代哲学の「自然と自由」の二元論で、正統神学に対抗する近代神学や現代神学は多く、この近代哲学的認識論、「自由と自然」の二元論の上に立っています。そこでは信仰の問題は、神との関係において考えられず、自然的因果性の支配や疎外からの自由の回復という人間の自己意識内部の事柄になってしまって、正しい聖書的信仰の契機は何一つ見出されず、自然的理性があらゆる領域の究極的真理判定者、立法者となってしまいます。宗教は人間に単なる自然因果性に規定される自然存在としての在り方を超える高度の自由を回復させる手段となり、信仰は聖書的表象によってこのことを望む希望の事柄となります。

第三に退けられるべき立場は、信仰一元論とも称すべきもので、異教哲学を退けることを、何か理性機能そのものを退けることであるかのように考えてしまいます。すると信仰は地上的な人間の歩みとしての文化や労働に具体化されることがなくなってしまいますから、修道院思想になるか、それとも、地上的歩みの中に信仰を無媒介に持ってくる狂信主義となって、その場合には、聖言の光が地上的歩みを照らす確かな知識として客観化される契機を欠いていますから、しらずしらずのうちに、地上的歩みにおいては主観的信仰が支配して結局覆面された恰好で健在する自律的理性の主張に従っていることになります。これら三つの立場に共通していることは、理性の自律性の原理を承認していることであります。

これに対して、山中先生はいかなる意味でも理性の自律性の原理を拒否されます。堕罪の下にあってともに本来の認識対象を見失い、両者の連動性を失い、ともに本来の使命を果たせなくなって誤ってのみ機能している信仰と理性が、キリストの贖いによって新たにされた者の再生的信仰と再生的理性として回復され、高次の統一性を与えられて、天上的事象の認識能力としての信仰と地上的事象の認識能力としての理性として連動し、正しい信仰は上なるものの認識を深めて信仰から信仰へと成長しつつ、この信仰を再生理性は地上的事象の認識の中に具体化して、あらゆる地上的文化的営みや、キリスト者が神の御前に為す一切の業としての労働を通して生の全領域において神の主権を仰ぎ見、神の栄光のために仕えようとするのであります。山中先生の哲学はこのような道を原理的に拓こうとする努力であります。このように、先生は一切の二元論や狭い意味の信仰一元論を排して、信仰と理性の関係の問題をいろいろなレベルと角度から、アウグスティヌスやカルヴァンなどの教会の先達の古典的業績を受け継ぎながら、同時に今日の近代的認識論の厄介な問題提起の中で、聖言に聴従しながら独自の思索を粘り強くなして、有神論的思惟の確立のために苦闘されたのであります。この山中先生の信仰と理性の議論をよくマスターすることは、わたしたちの教会が近代哲学的認識論に立っているリベラルな近代神学や現代神学を批判する時にも、あるいは信仰と科学の問題について考える時にも、あるいは聖書に基づいてあらゆる実在領域に関する包括的世界観というような積極的意味でのキリスト教哲学を求める時にも、あるいは労働や文化の領域ではキリスト者として有効な視点を持てないで悩む時にも、非常に強力な武器を得たことになるでしょう。

このような有神論的認識論追求の仕事が先生の理論哲学であるとすれば、この有神論的思惟の上に立って展開された先生のもう一つの関心としての実践哲学が、聖書的倫理学であります。これをわたしたちは②と④の著書において学ぶことができます。紙数の制限をもう超えていますので、④について、すなわちかなり広い幅を持つ聖書的倫理学

のうち特に聖書的労働観について一言、言及するにとどめます。ここには、スキルダーの思想の影響が見られますが、キリストの血による尊い救にあずかったキリスト者は救が終点であるかのように安心立命の境地にひたってこの尊い救を魂の内奥にしまい込んでおくことはできないということであります。信仰を再生的理性が地上的事象の認識の中に具体化するという認識論のレベルにおける主張と対応していることに気付きます。罪のために創造の目的を遂行できなくなっていた人間が、キリストの贖いに与って本来の創造の目的に仕えることのできる立場に再興されたのがキリスト者であります。このようにキリストの救の意義を神の宇宙経綸の再興として始源的命令の脈絡の中で捉え、キリスト者は、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ」という文化命令の続行の条件を与えられたものとして、創造の目的を遂行するところに労働の有神論的意義を考えようとされているのであります。そして、キリスト者の労働は、やがて来り給う再臨のキリストによって総括されるわけであり、キリスト者の労働を創世記から黙示録にいたる聖書の啓示全体の光の中で捉えようとされているわけであります。枠組こそスキルダーから来ていますが（②の冒頭に同様な議論を扱った箇所〔第一章第一節（イ）〕がありますが、そこではこの枠組はまだ明確ではない）、その枠組の中で展開されている議論には、先生の独自な長年の思索や社会倫理学研究が媒介されており、非常にこの主張は明解な説得力のある議論となっています。

先生の巾の広い深い思索をこの短い記事の中に適確に表現できないことを残念に思いますが、会員諸兄が直接に先生の著述に取組まれて、日本の福音主義陣営のために、御国の進展のために、この尊い遺産を継承して行かれますように祈ってやみません。最後に『福音主義神学』の先生の論文の結論の言葉から引用してこの私の拙い一文の良き結語としたいと思います。

「キリストの十字架をたんに宗教と倫理の領域にのみ立てられたものとする狭い福音主義を否定して、キリストの

十字架を、学問、芸術、職業、文化のあらゆる領域のゴルゴタの丘に立てられたものとしてすすむ福音の拡大化を目標としなければならない。悪魔は宗教と倫理の領域のみではなく、神の支配される全領域に広がっているので、そのあらゆる領域において、キリストから派遣された一兵士として悪魔と戦わねばならない。神のよろこばれる学術、芸術、文化、職業にして、キリストの十字架の救を通さない領域はありえない。世界のあらゆる領域にゴルゴタの十字架が立てられているからこそ、すべての領域での戦いと神の文化の建築が命ぜられている。宗教と文化の二元化の類型をもって、どうして、日本の文化の方法論的多元化の矛盾に統一の原理を与えることができるであろうか。……これからの日本の伝道は、福音の使命をたんに空間的に『エルサレム、サマリヤ、地の果てにまで』伸すばかりでなく、文化の世界において『地の果てにまで』進展してゆかねばならない。聖書の原理に立って、文化の一大綜合統一を志し、日本の文化の雑居性に生命的統一を与えて、文化を潔め、思想の『断片化』（スキルダー「キリストと文化」一六一頁）の病根をたたねばならない。これからの日本の伝道は広い視野と深い霊的洞察をもって救霊と救文化とを目ざしたものでなければならない。そして創世記一章二八節に『生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ』という始源的命令に帰らなければならない。」

（関西学院大学教授、神戸改革派神学校講師）

編集後記

昨年の本誌第七号の編集後記で期待を述べたとおり、「一層の内容の充実と向上」を見た第八号をお届けできますことを、執筆者各位の協力のおかげと心から感謝しております。

まず、論文を予定どおり三本、それに西部部会の研究発表二篇を掲載することができました。村岡氏は現在英国マンチェスター大学で教えておられますが、『聖書外典偽典』（教文館発行）の訳業にも参加されており、本号に掲載の論文はその訳業に関係したものです。高力氏は社会倫理に関心の深い若手の学究で、本学会の書記をしておられます。

書評の一つに、本学会に所属する執筆者たちによる「五書」注解として注目される『新聖書注解』旧約第一巻を取り上げました。編集者たちは、これが福音主義に立つ「五書」批評の諸問題を掘り下げる積極的契機になれば、と願っております。同書についての書評やご意見があれば、ぜひ次号に取り上げさせていただきますので、ご遠慮なく寄稿してください。

第六号から始めた文献紹介を、本号でも新しい二分野でお願いしました。聖書翻訳に関する日本語文献と宣教学とに関するものです。それから、東部部会・西部部会を含む全国理事会の理事長となられた服部嘉明氏に、特に巻頭言を寄せていただきました。なお、同氏ならびに横山武氏（書記）の労で、過去数年にさかのぼる東部部会・西部部会の活動報告をまとめていただきました。

西部部会理事として本学会のために大きな貢献をしてこられました山中良知先生が、本年六月三日、主の御許に召されました。本誌の編集者のお一人である春名純人氏は山中先生と親しい関係にあられましたので、特にお願いして「山中良知先生の信仰と学問」という貴重な一文を寄せていただきました。それを巻末に収めましたので、深く味わっていただければ幸いに存じます。

（村瀬俊夫）

昭和五十二年十一月十日発行　頒布価　一、二〇〇円

編集者　村瀬俊夫
　　春名純人
　　津村俊夫

発行者　東京都東久留米市永川台一ノ八ノ一五　日本基督神学校内
　　日本福音主義神学会

印刷　いのちのことば社印刷部

発売　いのちのことば社